

令和7年度 日本赤十字社北関東三県支部
青少年赤十字国際交流マレーシア派遣報告書



派遣期間 ▶ 令和7年7月20日(日)~25日(金)

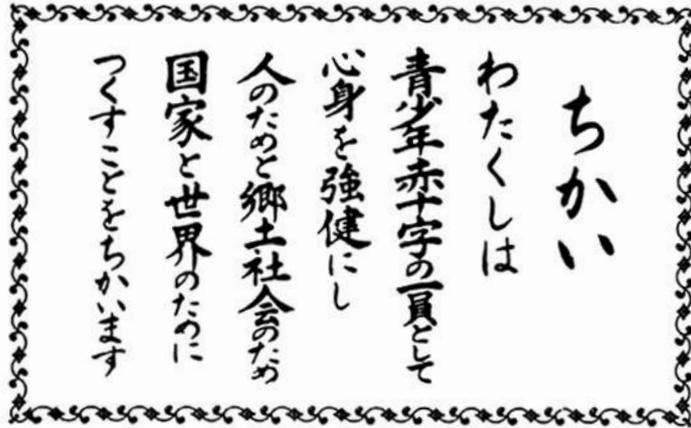


日本赤十字社茨城県支部
日本赤十字社栃木県支部
日本赤十字社群馬県支部



CONTENTS

日本赤十字社北関東三県支部代表事務局長挨拶	1
団長挨拶	2
リーダー挨拶	3
青少年赤十字国際交流派遣事業実施要項	4
団員名簿	7
派遣日程	8
団員プロフィール	10
行程日誌	13
公式訪問記録	19
自由研究	24
感想文	39
追録：事前・事後研修会、お世話になった方たち	60
追録：派遣事業の思い出	61



ちかい
わたくしは
青少年赤十字の頁とて
心身を強健にし
人のためと郷土社会のため
国家と世界のたのみに
つくすことをちかいます

空は世界へ

- 一、空は世界へ つづいてる
空は世界を だいている
みんなごらんよ あの空を
空が僕らの 私らの
こころよ心よ 少年赤十字
- 二、花はだれにも 匂つてる
花はやさしく 匂つてる
みんなごらんよ あの花を
花が僕らの 私らの
すがたよ姿よ 少年赤十字
- 三、星はどこでも 光つてる
星は伸よく 光つてる
みんなごらんよ あの星を
星が僕らの 私らの
ほこりよ誇りよ 少年赤十字
- 四、旗は十字の 愛の旗
旗はかがやく 愛の旗
みんなごらんよ あの旗を
旗が僕らの 私らの
しるしよしるしよ 少年赤十字

青少年赤十字の歌

- 一、明けそめる 大空に
みなぎる光 あふれるいのち
われら若人 われら若人
健康の足並そろえ
進むのだ かがやく途を
ひとすじに かがやく途を
- 二、さしのべる手を 組んで
あわせる力 つらぬくまこと
われら若人 われら若人
清純の ちかいにこそり
尽くすのだ 世界のために
人のため 世界のために
- 三、海こえて へだてなく
呼び合う心 ゆき交うこだま
われら若人 われら若人
親善の 結びもかたく
仰ぐのだ 十字の旗を
ひるがえる 十字の旗を

日本赤十字社北関東三県支部代表事務局長挨拶



日本赤十字社茨城県支部

事務局長 池 元 和 典

「日本赤十字社北関東三県支部青少年赤十字国際交流派遣事業」は、日本赤十字社の三県支部（茨城県・栃木県・群馬県）が、青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」を具体化する活動の一環として実施しているものです。

この事業では、青少年赤十字メンバーおよび指導者を、海外の赤十字（赤新月）社に派遣し、現地での赤十字事業の視察や、現地メンバーとの交流を通じて、両国における青少年赤十字活動の普及・発展に寄与することを目的としています。

本事業は昭和 63 年から継続して実施しており、これまでにネパール、インドネシア、オーストラリア、カンボジア、モンゴル、ベトナム、シンガポールなど、数多くの国々に青少年赤十字メンバーおよび指導者を派遣してまいりました。

本年度は、各県支部から推薦された中学生・高校生メンバー 15 名に、指導者、事務局職員、看護師を加えた総勢 21 名を、5 泊 6 日の日程でマレーシアに派遣いたしました。

派遣団は、マレーシア赤新月社本社をはじめ、IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）、病院、現地の学校を訪問し、それぞれの場所で温かい歓迎を受けながら、現地の方々との交流を通じて貴重な経験を積むことができました。

特に、現地学校における交流では、派遣団員たちが自らの言葉で日本文化を発信することの楽しさ、難しさを実感するとともに、マレーシアの生徒たちからは伝統の踊りや楽器などを紹介いただき、参加者全員にとって深く印象に残る体験となったようでございます。

本報告書には、団員たちが現地で体験した活動の内容が、生き生きと綴られています。ぜひ、ご一読いただき、本事業の意義と青少年赤十字の目標である「国際理解・親善」の活動について、ご理解いただけましたら幸いです。

結びに、本事業の実施にあたり、ご理解とご協力を賜りました保護者の皆様、学校関係者の方々、そして適切にご指導とご支援をいただきました栃木県支部・群馬県支部ならびに日本赤十字社本社の関係者の皆様に、心より感謝申し上げますとともに、本事業が今後さらに充実・発展していくことを祈念し、代表支部からの挨拶とさせていただきます。

団長挨拶



心をつなぐ国際交流事業

茨城高等学校

教諭 井上 奈穂

この度、日本赤十字社北関東三県支部青少年赤十字国際交流マレーシア派遣事業において、団長を務めさせていただいたことを、大変光栄に思います。

本事業は、青少年赤十字の実践目標である「国際理解・親善」を実現する活動の一環として、令和7年7月20日から25日にかけて実施され、群馬、栃木、茨城の各県から代表生徒5名と教員1名、さらに、日赤茨城県支部職員2名、水戸赤十字病院の看護師1名を加えた計21名の国際交流事業団がマレーシアを訪れました。

マレーシア赤新月社(MRC)をはじめ、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、赤新月社施設(病院)、赤新月社加盟校2校を表敬訪問しました。

赤新月社では、マレーシアの青少年赤十字による活動についてお話を伺い、日本から寄贈された救急車を見学しました。また、難民一人ひとりの情報が手書きで記録されたカードも拝見し、その膨大な数に圧倒されました。

IFRCでは、日本人スタッフの方から日頃の取り組みについてお話を伺うとともに、施設内を見学させていただきました。

赤新月社施設においては、医師から経済的に治療を受けられない方々に無償で医療を提供していることや、Ⅱ型糖尿病の患者の増加がしていることを学びました。透析治療の現場を見せていただくとともに、27年間透析治療を受けている患者さんから直接話を聞くことができたことは貴重な経験でした。

何よりも印象深かったのは現地のJRC加盟校の生徒たちとの交流です。到着した私たちは民族楽器の演奏とともに歌や踊りで熱烈な歓迎を受け、やや緊張気味だった生徒たちもすぐに笑顔になりました。訪問校では、浴衣の紹介やお祭り、折り紙、学校生活紹介に加えて、日本の歌とダンスを披露しました。今回の研修への生徒たちの思いと熱量が伝わる素晴らしい発表でした。その後、マレー舞踊を教えていただいたり、伝統的なゲームの「コンカ」で遊んだり、楽しい時間を過ごすことができました。そして、同じ旗の下で活動する私たちの心は1つだと感じました。

滞在期間中、心に残ったのは、赤新月社のダニエル事務総長が生徒たちに向けて語った言葉です。

「将来のリーダーではなく、役割を果たしている今日からリーダーです。」

この言葉は、生徒たちにとって強く心に響くメッセージだったと思います。

今回の派遣を通して、生徒たちは外国の方々と交流する楽しさを実感し、言葉が違っていても「伝えたい」という気持ちがあれば、しっかり思いが通じること、そして人と人とのつながりの大切さを学んだのではないかと思います。この経験をきっかけに、異文化への理解を深めながら、交流の中で育んだ思いやりや広い視野を、これからの平和や国際協力に生かしてくれることを願っています。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださったマレーシアの施設関係者の皆様、現地スタッフの皆様、そして派遣事業の実施に多大な時間と労力を費やしてくださった日本赤十字社茨城県支部の皆様、さらには関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

リーダー挨拶



人の温かさに支えられて

茨城高等学校

山田 隆太郎

この度は、令和7年度日本赤十字社北関東三県支部青少年赤十字国際交流マレーシア派遣事業に参加させていただき、誠にありがとうございました。貴重な機会を与えてくださった日本赤十字社に深く感謝するとともに、本派遣を支えてくださったすべての皆様に心より御礼申し上げます。

帰国した今、マレーシアでの活動を振り返ると、印象に残っていることが数え切れないほどあります。その中でも特に心に残っているのは、現地の方々の温かさです。本事業では、マレーシア赤新月社本社、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）アジア大洋州地域事務所、赤新月社関連病院、そして加盟校である中等教育学校二校を訪問させていただきました。どの場所でも温かく迎えていただき、緊張の中で臨んだリーダー挨拶に大きな拍手と笑顔をいただけたことが、不安を自信へと変える大きな力となりました。

その後の各県での発表全体が大きな盛り上がりにつながり、途中で設備の不具合などハプニングもありましたが、臨機応変に対応し、会場全体で笑い合いながら楽しめたことも、忘れられない経験となりました。

また、今回の派遣を成功に導けたのは、二か月間にわたって共に準備を重ねてきた仲間のおかげです。多様な個性が集まったからこそ、互いの強みを生かして一つのチームとして活動することができました。笑いの絶えない練習や、真剣に意見を交わした時間、夜遅くまで続けた準備、そのすべてが本番での自信や団結につながったと思います。リーダーとして未熟な私を支えてくれた仲間のおかげで、最後まで前に立ち続けることができました。この「支え合い」こそ、今回の研修を通じて私が一番実感したことです。

さらに、現地の生徒から日本についてインタビューを受け、自分の言葉で日本の文化や生活を紹介できたことも大切な学びでした。相手に伝えたいという気持ちと、相手を理解しようとする姿勢があれば、言語の壁を越えて交流できるのだと体感できました。国と国との交流はこうした小さな対話から始まり、そうして相互理解へとつながるのだと思います。

今回の派遣で得た経験は、私たちの人生の大きな財産になりました。これからそれぞれの道を歩んでいきますが、「違いを力に変えること」「仲間と協力し合うこと」「人の温かさを信じること」を忘れずに、それぞれの場所で実りある人生を築いていきたいと思っています。

最後になりましたが、この派遣を支えてくださった先生方、看護師の方々、事務局の皆さま、現地ガイドさんや通訳さん、スタッフの方々、そして温かく迎えてくださったマレーシアの皆さまに改めて感謝申し上げます。ここにリーダーとしての挨拶を締めくくらせていただきます。本当にありがとうございました。

令和7年度日本赤十字社北関東三県支部 青少年赤十字国際交流派遣事業実施要項

1. 事業名

令和7年度日本赤十字社北関東三県支部青少年赤十字国際交流派遣事業
(略称：日赤北関東三県支部JRC国際交流派遣事業)

2. 目的

本事業は、青少年赤十字の実践目標の1つである「国際理解・親善」の具体的な活動機会として、メンバー及び指導者を海外赤十字（赤新月）社に派遣し、赤十字事業の視察やメンバー間の文化交流を通して両国の青少年赤十字活動の普及と発展に寄与することを目的とする。

3. 主催

日本赤十字社茨城県支部
日本赤十字社栃木県支部
日本赤十字社群馬県支部

4. 実施当番支部

日本赤十字社茨城県支部（担当：組織振興課 奉仕・青少年係）
〒310-0914
茨城県水戸市小吹町2551
TEL：029-284-1380（直通）

5. 派遣先

国 名：マレーシア
赤十字社：マレーシア赤新月社

6. 実施期間・日程

期間：令和7年7月20日（日）から令和7年7月25日（金）まで
日程：派遣先赤新月社と調整のうえ、事前研修会で説明する。
※7月20日（日）は成田前泊とする。

7. 主たる訪問先・内容

- (1) 訪問先
マレーシア赤新月社 本社・支部・施設
マレーシア青少年赤十字加盟校
- (2) 内容
赤十字事業の視察、交流会

8. 派遣団の構成

区分		支部	茨城県	栃木県	群馬県	計
団員	青少年赤十字メンバー		5名	5名	5名	15名
	青少年赤十字指導者		1名	1名	1名	3名
本部員	支部職員		2名			2名
	看護師		1名			1名
計			9名	6名	6名	21名

9. 団員の参加資格

派遣団員の資格は、次の条件のすべてを満たしていること。

(1) 青少年赤十字メンバー

- ・青少年赤十字加盟校の中学校1～3年生、高等学校1・2年生、義務教育学校7～9年生、中等教育学校1～5年生で、所属学校長から推薦がある者。
- ・心身ともに健康で、協調性に富み、規律に従って行動できる者。
- ・トレーニング・センターや研究会等において体験談を公表できる者。
- ・派遣に係る研修会（支部研修、事前研修、事後研修）の全日程に参加でき、保護者から承諾を得た者。
- ・派遣前から自己研鑽に努めるとともに、派遣後は団員としての経験を活かし、青少年赤十字リーダーとしての活躍が期待できる者。
- ・本事業に参加したことがない者。

(2) 青少年赤十字指導者

- ・青少年赤十字の指導者で、所属学校長から承認を得た者。
- ・研修会等において、体験談を公表できる者。
- ・派遣に係る研修会（スタッフ研修、支部研修、事前研修、事後研修）の全日程に参加できる者。

10. 経費負担区分

(1) 青少年赤十字メンバー

- ・旅行代金 301,702円の1/3を派遣メンバーが負担し、2/3を派遣支部が負担する。
- ・派遣メンバーの都合により参加を取りやめ、キャンセル料が発生した場合は派遣メンバー負担額までは本人が負担し、負担額を超えた分は派遣支部が負担する。

(2) 青少年赤十字指導者

- ・旅行代金 301,702円は、派遣支部が全額負担する。

(3) 共通

- ・自宅-成田間の交通費については、派遣支部の定めによる。
- ・派遣にかかるその他費用（ユニフォーム代、研修会費用等）は、共通経費（派遣団員1人当たり80,000円）として、派遣支部が負担する。

11. その他

(1) 青少年赤十字メンバー

- ・超過手荷物費用、クリーニング費用等、個人的な費用は個人負担とする。
- ・その他、記載のない経費については、派遣支部の定めによる。

12. 派遣に係る研修会（予定）

(1) スタッフ会議

- 期 日： 令和7年5月19日（月）
会 場： 日本赤十字社本社 501会議室
対 象： 団員（指導者のみ）、本部員、各県支部職員

(2) 支部研修会

- 期 日： 令和7年5月31日（土）もしくは6月1日（日）
会 場： 団員が所属する支部
対 象： 団員、保護者、団員所属校 J R C 指導者、本部員

(3) 事前研修会

- 期 日： 令和7年6月14日（土）～ 15日（日）
会 場： 日本赤十字社本社 504会議室 及び近隣ホテル
対 象： 団員、本部員

(4) 事後研修会

- 期 日： 令和7年8月17日（日）～18日（月）
会 場： 日本赤十字社本社 504会議室 及び近隣ホテル
対 象： 団員、本部員

団員名簿

青少年赤十字メンバー

支部名	No	氏名	性別	学校名	学年	役割
茨城県	1	まつさかりん たろう 松坂凜太郎	男	茨城県立結城第一高等学校	2年	公式訪問記録
	2	ほしの せな 星野 世那	女	茨城高等学校	2年	連絡調整員 日直 (7/20)
	3	やまだりゅう たろう 山田隆太郎	男	茨城高等学校	2年	リーダー 公式訪問記録
	4	よしなり ゆきこ 吉成侑希子	女	清真学園高等学校	2年	日直 (7/23)
	5	むらの あん 村野 杏	女	常総学院高等学校	2年	公式訪問記録
栃木県	6	たなべ つむぎ 田辺 紬	女	栃木県立栃木女子高等学校	2年	公式訪問記録
	7	たなか みゆ 田中 美結	女	栃木県立真岡女子高等学校	2年	連絡調整員
	8	みやもと あゆむ 宮本 歩夢	男	栃木県立宇都宮高等学校	2年	日直 (7/21) 公式訪問記録
	9	ふかづ もこ 深津 もこ	女	栃木県立小山西高等学校	2年	サブリーダー
	10	さの ことろう 佐野琥太郎	男	栃木県立小山城南高等学校	2年	日直 (7/24) 公式訪問記録
群馬県	11	にわ きき 丹羽 稀咲	女	群馬県立高崎北高等学校	2年	連絡調整員 公式訪問記録
	12	こばやし さきほ 小林 咲穂	女	群馬県立渋川女子高等学校	2年	公式訪問記録
	13	はちゅうだ さくら 羽中田桜花	女	太田市立太田高等学校	2年	公式訪問記録
	14	おおた いと 太田 いと	女	明照学園樹徳高等学校	2年	日直 (7/22) 公式訪問記録
	15	せきぐちな なみ 関口奈々美	女	群馬大学共同教育学部附属中学校	1年	日直 (7/22)

指導者

支部名	No	氏名	性別	学校名	役割
茨城県	1	いとうえ なほ 井上 奈穂	女	茨城高等学校	団長
栃木県	2	たかつ とゆうひ 高津戸雄飛	男	栃木県立小山城南高等学校	副団長
群馬県	3	にしむら ゆうき 西村 雄希	男	太田市立毛里田中学校	生活指導

日本赤十字社事務局

支部名	No	氏名	性別	所属・職名	役割
茨城県	1	てるやま てつじ 照山 哲司	男	日本赤十字社茨城県支部 組織振興課長	本部長
	2	いままつ さとこ 今松 聡子	女	水戸赤十字病院 看護師	健康管理
	3	さたにし おり 佐谷詩央莉	女	日本赤十字社茨城県支部 組織振興課主事	庶務・会計

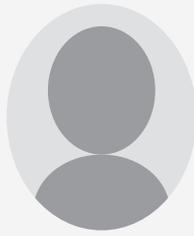
派遣日程

日付	時間	活動	場所	備考	
7月20日 (日)	午前中	各自ホテルへ			
		ホテル集合	成田ゲートウェイホテル	三県メンバー合流	
	14:10	出発式 出国手続き等説明	ホテル会議室	旅行会社職員から	
	15:10	交流会の練習			
	18:00	夕食（お弁当）	ホテル会議室		
	19:15	交流会の練習、翌日準備			
	20:00	就寝			
7月21日 (月)	6:30～	朝食			
	7:30	成田ゲートウェイホテル 出発			
	7:40	成田空港 着	成田空港		
	10:20	マレーシアに向けて出発		MH089便 昼食（機内食）	
		(以下、マレーシア現地時間)			
	16:30	マレーシア到着	クアラルンプール国際空港	入国手続き 現地ガイドと合流 専用バス乗車	
	19:14	夕食・ミーティング（中華）	GOLDEN DRAGON BOAT		
	20:55	ホテル到着 就寝	MAYAホテル		
7月22日 (火)	8:15	ホテル出発	MAYAホテル	専用バス	
	8:40	マレーシア赤新月社訪問 両国代表による挨拶、マレーシア赤新月社活動紹介、施設案内、活動紹介、	マレーシア赤新月社本社		
	12:25	ユースの活動・マレーシアの文化紹介、 記念撮影			
	12:40	昼食（飲茶料理）	MarcoPolo		
	14:00	I F R C訪問 代表挨拶、三亀さん講話、質疑応答、 JRC メンバーによるプレゼンテーション (日本の文化紹介)、	I F R Cアジア大洋州地 域事務所		
	16:05	施設訪問、写真撮影			
	16:30	ピューター工場見学	Royal Selangor Pewter		
	17:55	パトゥ洞窟見学	Batu Cave		
	19:05	夕食（インド料理） ミーティング	Passage Thru India		
	20:35	ホテル到着	MAYAホテル		
	20:45	市内視察 ペトロナスツインタワー	Petrinas Twin Tower	外観視察、写真撮影	
21:05	ホテル到着 就寝	MAYAホテル			

日付	時間	活 動	場 所	備 考
7月23日 (水)	9:30	ホテル出発	MAYAホテル	専用バス
	9:50	現地赤十字施設（病院）訪問 施設見学（診察室、透析室、診断センター）、提供サービスの説明、質疑応答、記念品贈呈、記念撮影	KalininAmalKualaLumpur	
	12:00	昼食（ビュッフェ）	Kampong Kitchen	
	13:15	学校訪問	SMK Desa Petaling	
	14:00	両国挨拶、歓迎のダンス、 交流会、救急法体験、JRC メンバーによるプレゼンテーション（日本の文化紹介、歌、踊り、おりがみ）		
	17:15	市内視察（スーパーマーケット）	パビリオン	
	18:00	夕食（ウエスタン料理）	The barn pavilion KL	
	18:55	ミーティング	専用バス内	
	20:45	ホテル到着	MAYAホテル	
	21:00	就寝		
7月24日 (木)	8:00	ホテル出発	MAYAホテル	専用バス
	9:00	学校訪問	SMKTameanMelawati-Rasmi	
	12:30	両国挨拶、歓迎のダンス、 軽食、交流会、映像視聴、JRC メンバーによるプレゼンテーション（日本の文化紹介、歌、踊り、おりがみ）、写真撮影		
	13:00	昼食（ニョニャ料理）	PRECIOUSOLOCHINA	
	14:00	ショッピング	セントラルマーケット	
	15:00	市内視察	王宮	
	16:00		独立公園（ムルデカ広場）	
	17:30		ピンクモスク	
	18:40	夕食（スチームボート）	VOLCANO	
	21:00	空港到着	クアラルンプール国際空港	現地ガイドとお別れ 出国手続き
7月25日 (金)	0:00	飛行機搭乗 日本に向けて出発	機内泊	MH088便
		朝食	機内	
		(以下、日本時間)		
	8:30	成田空港着		入国手続き
9:10	解散式 各自帰路へ	成田空港内		

氏名

- ①ニックネーム
- ②県名（支部）
- ③学校名
- ④将来の夢
- ⑤趣味
- ⑥好きな言葉
- ⑦マレーシアで一番の思い出
- ⑧メンバーへ一言



松坂 凜太郎

- ①マミー
- ②茨城県
- ③茨城県立結城第一高等学校
- ④看護師
- ⑤音楽を聴くこと・クロスワードを解くこと
- ⑥笑顔・幸せ・感謝
- ⑦赤十字病院を訪問し、透析治療についてお話を聞いたこと
- ⑧みなさんのおかげで充実した5日間になりました。ありがとうございました。



星野 世那

- ①せな
- ②茨城県
- ③茨城高等学校
- ④気象予報士
- ⑤音楽鑑賞
- ⑥人生一度きり
- ⑦赤新月社加盟校への訪問
- ⑧この研修を通して、メンバーのみんなと共に成長できて良かったです。一生の思い出をありがとう！



山田 隆太郎

- ①りゅうくん
- ②茨城県
- ③茨城高等学校
- ④人を幸せにすること！
- ⑤ランニング、書道
- ⑥たいていのチャンスのドアにはノブが無い。自分からは開けられない。だれかが開けてくれたときに、迷わず飛び込んでいけるかどうか
- ⑦一番が決まらないほどにどれも最高の思い出です
- ⑧キラキラした宝物をありがとね！！！！



吉成 侑希子

- ①なり
- ②茨城県
- ③清真学園高等学校
- ④研究者
- ⑤音楽フェス、ライブに行く事
- ⑥容易く叶う夢は 叶わぬ夢の次に悲しい
- ⑦ガイドさんと英語で話が盛り上がり、「お前最高だよ！」と言われた事
- ⑧最高の仲間と出会えて良かったです！一生物の経験をみんなと体験出来て嬉しいです。ありがとうございました。大好きだよ～！！



村野 杏

- ①あん
- ②茨城県
- ③常総学院高等学校
- ④管理栄養士
- ⑤映画鑑賞、音楽鑑賞
- ⑥情けは人の為ならず
- ⑦訪問した学校でたくさん練習した発表とダンスをしたこと
- ⑧本当に出会えて良かったです！5泊6日ありがとうございました。



田辺 紬

- ①つむつむ
- ②栃木県
- ③栃木県立栃木女子高校
- ④人を楽しませたり、笑顔にすることが出来る人になる
- ⑤体を動かすこと
- ⑥諦めたらそこで試合終了だよ
- ⑦学校での交流で、学生と楽しくコミュニケーションを取れたこと
- ⑧この経験を奇跡のように集まった仲間と過ごせて幸せです！



田中 美結

- ①みー
- ②栃木県
- ③栃木県立真岡女子高等学校
- ④情報 or 機械エンジニア
- ⑤ハンドメイド、推し活
- ⑥ありがとう
- ⑦現地校の歓迎と交流
- ⑧あっという間に過ごした海外生活、皆さんのおかげで楽しく過ごせました。この出会いにありがとう！



宮本 歩夢

- ①みやもん
- ②栃木県
- ③栃木県立宇都宮高等学校
- ④医者
- ⑤弓道
- ⑥意志あるところに道は開ける
- ⑦色々な現地のおやつが食べられたこと
- ⑧とても楽しく、充実した 6 日間でした！ありがとうございます！マレーシア研修にこのメンバーで行けてよかったです！



深津 もこ

- ①もっさん
- ②栃木県
- ③栃木県立小山西高等学校
- ④家族にたくさん恩返しをすること
- ⑤寝ること、アニメを見ること、絵を描くこと
- ⑥努力ができない人はやらないだけ
- ⑦マレーシアの生徒の方々がたくさんゲームをしてあそんだこと！
- ⑧6日間の思い出は幸せなものばかりで、出会えてよかったと思っています。私たちが努力を重ねたいつか、またパワーアップした私たちで会えることを願っています。みんな大好き！



佐野 琥太郎

- ①こったん
- ②栃木県
- ③栃木県立小山城南高等学校
- ④一級建築士
- ⑤料理、スポーツ、TCG
- ⑥常識的な生き方は上振れない
- ⑦民族衣装を着て、現地の人と写真を撮ったこと
- ⑧この 14 人で研修を終えられて本当によかったです。二度とない体験をありがとう



丹羽 稀咲

- ①きーちゃん
- ②群馬県
- ③群馬県立高崎北高等学校
- ④土木師
- ⑤音楽を聴くこと
- ⑥一隅を照らす
- ⑦学校訪問で現地の生徒とたくさんお話したこと
- ⑧みなさんと研修ができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました！



小林 咲穂

- ①さっきー
- ②群馬県
- ③群馬県立渋川女子高等学校
- ④看護師
- ⑤音楽を聴くこと
- ⑥「今できることを精一杯に」先にはきっと、明るい未来があると信じて
- ⑦学校訪問で、同世代の生徒達の温かい笑顔に出会い、とても楽しく交流ができたこと。
- ⑧みんなとの出会いは一生の宝物です！本当にありがとうございました！



羽中田 桜花

- ①はっちゅう
- ②群馬県
- ③太田市立太田高等学校
- ④薬剤師
- ⑤食べること、音楽を聴くこと、御朱印集め
- ⑥努力は必ず報われる
- ⑦現地校での交流、沢山の人たちに温かく歓迎してもらえたこと
- ⑧みんなと出逢えて本当に幸せです！忘れられない最高の思い出をありがとうございました！



太田 いと

- ①いと
- ②群馬県
- ③明照学園樹徳高等学校
- ④健康で暮らすこと
- ⑤読書・ドラマ鑑賞
- ⑥夢なき者に成功なし
- ⑦加盟校訪問
- ⑧みんなと出会えて、一緒に研修に参加できて本当によかったです！ありがとうございました！



関口 奈々美

- ①ななちゃん
- ②群馬県
- ③群馬大学共同教育学部附属中学校
- ④医師
- ⑤ドラマ鑑賞、絶叫マシン、推し活
- ⑥徳は静かに輝く
- ⑦現地の学校訪問で、日本のお祭りについて英語で会話できた事
- ⑧大変なこともあったけど、それ以上に楽しくて、たくさん笑った毎日でした！このメンバーだったからこそ得られた最高の経験に、感謝でいっぱいです！！



井上 奈穂



- ①なほちゃん
- ②茨城県
- ③茨城高等学校
- ④マレー語を勉強し、再びマレーシアへ行く
- ⑤パン作り（餡子推し）
- ⑥能力の差は小さく、努力の差は大きい
- ⑦現地校の生徒たちと交流する皆さんの姿
- ⑧このメンバーで研修をすることができて本当に良かったです。これからの皆さんの活躍を楽しみにしています！

高津戸 雄飛



- ①つどさん
- ②栃木県
- ③栃木県立小山城南高等学校
- ④宝くじを当ててもう一度大学に入る
- ⑤旅行・スポーツ観戦
- ⑥大盛り無料
- ⑦トイレのホースに挑戦したこと
- ⑧まだまだ広い世界の2か国目

西村 雄希



- ①にっしー
- ②群馬県
- ③太田市立毛里田中学校
- ④地元の発展に貢献する
- ⑤ショッピング・家族で出かけること
- ⑥人生は一度きり
- ⑦訪問先の方々とのコミュニケーションすべてが楽しかったです♪
- ⑧素晴らしい発表や交流でした。今後もこの感動や学び、出逢いを大切にしていきたいと思います。ありがとうございました！

今松 聡子



- ①そうちゃん
- ②茨城県
- ③水戸赤十字病院
- ④世界一周
- ⑤フェス参戦・ライブ観戦
- ⑥冬は必ず春となる
- ⑦団員メンバーの笑顔と初めての海外病院受診
- ⑧みんなの笑顔とやる気でパワーをもらいました。これからの活躍に期待しています。

照山 哲司



- ①てる
- ②茨城県
- ③日本赤十字社茨城県支部
- ④宇宙旅行
- ⑤美味しいものを食べる
- ⑥為せば成る
- ⑦メンバー皆の頑張り笑顔
- ⑧異国の地で得た経験や出会いは、何よりの財産です。その気づきや学びを今後の成長の糧とし、さらなる活躍を楽しみにしています！

佐谷 詩央莉



- ①しおちゃん
- ②茨城県
- ③日本赤十字社茨城県支部
- ④家族で海外旅行に行くこと
- ⑤旅行（の計画を立てること）、道の駅めぐり
- ⑥案ずるより産むが易し
- ⑦マレーシアでの皆さんの成長
- ⑧派遣事業での経験が、皆さんの今後の人生に活かされることを願っています。

行程日誌

7月20日（日曜日）

天候

晴れ

記載者

星野 世那

日	程
14:00	成田ゲートウェイホテル集合
14:10	出発式
15:10	交流会準備・確認
16:15	交流会通し練習 各県ごとに最終確認
18:00	夕食
18:50	ミーティング 本日の感想発表
19:15	交流会最終通し練習 最終確認
20:00	各部屋へ移動 就寝

所感



約1か月ぶりにメンバーと再会したが、事前研修以上のチームワークを発揮することができた。

交流会準備では、各支部で用意を行ってきたスライド発表が事前研修時よりも良いものとなっていた。

また、さんぽの歌、パプリカのダンス、折り紙

をマレーシアの生徒たちとどのようにしたら一緒に楽しめるのか、メンバーと試行錯誤を重ねることができた。

明日からマレーシア研修本番が始まるので、チームのみんなと共に成長して帰国できるように精一杯頑張りたい。



行程日誌	7月21日（月曜日）	天候	晴れ	記載者	宮本 歩夢
------	------------	----	----	-----	-------

日	程
6:30	朝食 成田ゲートウェイホテル
7:30	ホテル出発 成田空港へ
7:40	成田空港着
10:20	マレーシア航空89便 クアラルンプールへ (所要時間:6時間40分)
12:00	昼食（機内食）
16:30	クアラルンプール国際空港到着 現地ガイドと合流
19:14	夕食 GOLDEN DRAGON BOAT (中華料理)
20:55	マヤホテル到着

所感



入国時にトラブルもあったが全員が無事にマレーシアに降り立つことができてよかった。

マレーシア特有の気候を肌ではまだあまり感じることは出来なかったが、飛行機やバスの中から見える農場の様子やヤシの木などの植生からマレーシアの気候や文化などを感じることができた。

街では、マレー語や英語、中国語、アラビア語

までさまざまな言語表記があふれていて多文化国家の一部を見ることができたと思う。

トイレについては事前研修で、ウォッシュレットがなく日本より汚いと知り心の準備をしていたが、やはりトイレには衝撃を受けた。

夕食の中華料理は事前研修で食べた中華料理よりも辛くなく、食べやすくて美味しかった。



行程日誌

7月22日（火曜日）

天候

晴れ一時雨

記載者

関口奈々美

日		程	
8 : 15	ホテル出発	20 : 45	Petrinas Twin Tower到着
8 : 40	マレーシア赤新月社到着 視察（～12 : 25）		外観を視察（～21 : 00）
12 : 40	昼食 MarcoPolo（飲茶料理） （～13 : 40）	21 : 05	ホテル到着
14 : 00	IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟） 到着 視察・交流会（～16 : 05）		
16 : 30	ピューター工場到着 視察（～17 : 25）		
17 : 55	バトゥ洞窟到着 視察（～18 : 45）		
19 : 05	夕食 Passage Thru India（インド料理） （～20 : 25）		
20 : 35	ホテル到着		

所感



マレーシア赤新月社の中には、様々な国と交換をした記念品や災害時などでの救助トレーニングを行っている写真がたくさんあった。その写真はとても迫真性があり、救助トレーニングだと分かっていても、胸が痛くなるような写真ばかりだった。その後、会議室でマレーシア赤新月社の活動内容を学んだり、2019年に日本から寄贈された救急車を見学したり、戦争などでマレーシアに逃げてきた難民の方の個人情報をも全て紙で管理している部屋を見せて頂いたりした。マレーシア赤新月社は、「難民の方の家族探しや家庭のサポート、他国に移住させる」などの手厚い取り組みから、目標の中でも「奉仕」を大切にしていると感じた。

IFRCでは、赤十字社と赤新月社が普段から連盟同士でサポートできるような関係を築いていると分かった。そして、緊急時には応援依頼をするなど、お互いに協力しあって連盟を向上させていると知った。最近では、IFRCの活動に若者の声が届くよう、18歳から30歳を対象とした“YOUTH”（ユース）の導入を進める事で、将来のIFRC活動を発展させる仕組みづくりを目指していると伺った。

今日の行程内容から、マレーシアでも「人道」や「奉仕」を大切にし、国際理解と親善を深めていると感じた。自分も日々の生活の中で人道的な行動をし、命や尊厳を大切にしたいと考えた。

行程日誌	7月23日（水曜日）	天候	晴れ	記載者	吉成侑希子
------	------------	----	----	-----	-------

日	程
9：15	ロビー集合
9：30	ホテル出発、バス移動
9：50	Kalinin Amal Kuala Lumpur (現地赤新月施設) 施設見学
11：50	診察室、透析室、診断センター
12：00	出発
13：15	昼食 Kampong Kitchen ビュッフェ
13：50	出発 SMK Desa Petaling (赤新月加盟校)
17：15	挨拶、歓迎のダンス、交流会
18：00	出発
18：55	パビリオン (買い物) 夕食 The barn pavilion KL (ウエスタン料理)
21：00	ホテル到着

所感



赤十字病院は、貧しい人に低額で、もしくは無料で医療サービスを提供している。医者は、一部は雇用されていて、一部はボランティアである。この病院に無い薬を処方する際に処方箋を書くが、患者さんに薬を買うお金が無く問題になっていると聞き、自分の見えない所で自分の想像以上に貧富の差がある事を認識した。最後に、現地のお医者さんから将来医療関係のお仕事に就きたいと思っている人へのエールを頂いた。近年、世界的に医師不足が問題となっているのでその面でも医療は課題が山積だと思った。

お昼のバイキングでは、デザートが豊富にあって、



デザートを全制覇しようとする生徒が続出した。

赤十字加盟校では、交流会で民族衣装を2種類着せて頂いた。生徒さんが着せてくれたり、着方を教えてくれたりととても親切だった。現地のお菓子の材料や作り方を質問した時にも、丁寧にわかりやすかった。学校に訪問してまだ2時間の私たちにこんなに優しく接してくれて、マレーシアの空気に巻き込んでくれた。学校の生徒も本気で私たちが来るのを楽しみにしていた事が伝わり、私たちも事前研修の日から、本気で準備してきた良かったなと心から実感した瞬間だった。

行程日誌

7月24日（木曜日）

天候

晴れ

記載者

佐野琥太郎

日	程
8:00	ホテル出発
9:00	SMK Tamean Melawati-Rasmi 中学校 到着
12:30	SMK Tamean Melawati-Rasim 出発
13:00	昼食（ニョニャ料理） PRECIUSOLOCHINA
14:00	セントラルマーケット
15:30	王宮視察
16:00	独立公園（ムルデカ広場）
17:30	ピンクモスク
18:40	夕食（スチームボード料理）
0:00	飛行機搭乗

所感



マレーシア派遣4日目でみんな疲れが溜まっていて元気がなかったり体調を崩す人が多くいたりするなかでの交流会で不安だった。しかし、全員が団結して無事終わることができた。

ニョニャ料理の青いお米は、少し酸っぱい植物の香りがして初めての経験だった。セントラルマーケットでは自由行動で家族やお世話になって方々へマレーシアのお土産を買うことができた。王宮視察のとき他の団体日本人観光客と遭遇し、親近感と安心感を覚えた。独立公園では95メートルもある国旗掲揚塔があり、地震がほぼないからこその建築物で感動した。



ピンクモスクでは女性は全身を覆う布を被っていた。また、礼拝している人もいて宗教を強烈に感じ日本との違いを目の当たりにした。さらに、絨毯の模様でサウジアラビアの唯一神アッラーの聖地を示していることに驚いた。また、ドーム建築構造は音響をよくするためにあるという新たな学びもあった。最後にスチームボード料理を頂いた。東南アジアの鍋料理で、日本のしゃぶしゃぶにかなり近く食べやすかった。



行程日誌	7月25日（金曜日）	天候	晴れ	記載者	太田 ひと
------	------------	----	----	-----	-------

日		程
	飛行機内	
8:30	帰国	
9:10	解散式	
	井上団長からのお話	
	山田リーダーからのお話	
	今松さんからのお話	
	照山さんからのお話	
	佐谷さんからのお話	
9:25	解散 各自帰路へ	

所感

いよいよ帰国。体調不良者も多かったためまずは無事に全員で帰国できたことに安心した。体調不良者の荷物を持つ姿や「大丈夫?」「無理はダメだよ」と優しい声がたくさん見受けられ素晴らしいと思った。たくさんの困難を共にし、数多くの成功を共にしたメンバーがこのメンバーで本当に良かった。そして、その中の一員として活動でき

たことが誇らしく思う。ハードなスケジュールではあったが、スケジュール一つ一つに学びがあり、人の温かさに触れ合うことができた。この研修に参加して本当に良かった。関わってくださった全ての方に感謝でいっぱい。これからは私たちがこの研修で学んだことを伝えていきたい。



公式訪問記録

訪問先名称:

マレーシア赤新月社

視察日時: 7月22日(火) 8時45分～12時30分

記録者: 太田・田辺

訪問先対応者: 事務局長 Danielさん
赤新月社職員 Ayisyさん
Elaineさん
Rafiqさん
Sakinaさん

〈内容〉

1. MRCギャラリー訪問
2. 日本が贈った救急車を見学
3. MRC事務局の方によるマレーシア赤新月社の活動に関する話
4. RFCルーム訪問
5. 救急隊の方による説明・質疑応答
6. マレーシアの文化についての説明・ミニゲーム

〈詳細〉

マレーシア赤新月社本社の方々があたたかく迎えてくださった。日本語が堪能な方も多く日本語で挨拶をしていただいた。災害や事故に備え、事前のシュミレーションを行っていることがわかった。また、見学した救急車はコロナ禍の2019年に日本政府が寄付したものであった。戦争で離れ離れになった家族間の連絡を回復させるための記録を保管している RFC ルームという部屋があった。

〈発見〉

マレーシア赤新月社本社の方々と交流する中で、私たちは「未来のリーダー」を目指していくのではなく、今から「リーダー」として活動することを期待されていると知れた。文化は違うが、赤十字社も赤新月社も考え方は同じで、自分から積極的に動いていくことが重要だということを改めて知った。マレーシア赤新月社本社の方々には私たちに優しくあたたかく迎えてくださった。私たちはこの恩を忘れず、自分たち一人一人の活動で還元していきたい。



公式訪問記録

訪問先名称： **IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）
アジア大洋州地域事務所**

視察日時： 7月22日（火） 14時10分～16時00分 記録者： 丹羽・村野

訪問先対応者： 副代表 Kim Jujaさん
アジア大洋州地域ユース担当 三亀恭子さん

〈内 容〉

1. 副代表の方からの挨拶・紹介（Kim Jujaさん）
2. 北関東三県支部団長挨拶（井上奈穂先生）
3. 北関東三県支部リーダー挨拶（山田隆太郎さん）
4. 記念品贈呈
5. 写真撮影
6. JRCプレゼンテーション発表
7. IFRCについて（三亀恭子さん）
8. オフィスツアー

〈詳 細〉

アジア大洋州地域事務所では IFRC がどのような仕組みで成り立っているのか教えてくれた。IFRC は、第一次世界大戦後 1919 年に、アメリカ・フランス・イギリス・日本・イタリアが戦後の復興と国際人道支援の必要性に同意し、初めはその五カ国が一体となり設立されたそうだ。

さらに、アジア大洋州ユースネットワークという東アジア・東南アジア・南アジア・大洋州の 4 つの地域から選ばれたユース（5～30 歳）の役割と現在の課題についても教えてくれた。

〈発 見〉

IFRC のオフィスは、事務スペースや職員数の面から小規模のように見えたが、一人ひとりが持つ仕事量と責任が大きいのだと実感した。また、お互いを尊重しながら意見交換をしている様子も見ることができた。

さらに、お話を聞く中で、IFRC ではユースの活動を重要視していると聞いた。ユースはこれからの社会を背負う存在であり、自発的に問題を見つけ解決策を提案していくべきだと考えられていて、そのためにユースの声がより上層部に伝わる環境を整えていくことが現在の課題だそうだ。これらは私たちにとっても身近なことだと感じた。私たちも学校での活動など様々な場面で自ら考え、企画・提案することが求められるのだろう。

オフィスを案内してくださった三亀さんをはじめ、国際的な人道支援に関わるみなさんが笑顔で接してくださり、私もこのような環境で世界中の人々の支援に携わりたいと思った。

公式訪問記録

訪問先名称:

KLINIK AMAL PERCUMA

視察日時: 7月23日(水) 10時00分～12時00分

記録者: 小林・宮本

訪問先対応者: PARATHYROIDさん 医師
 RADHICKAさん 透析の看護師
 KHAIRUL NIZAMAさん 無料診療所部長

〈内容〉

1. 病院の事業紹介
2. 診療所の見学、提供サービスの説明
3. 透析施設の見学
4. 記念品の贈呈
5. 記念撮影



〈詳細〉

訪問した施設は寄付基金により無料診療や透析治療を行う病院だ。外国人や難民、貧困の患者に対しボランティアの医師が診療を行なっている。皮膚のトラブルや細菌感染による症状などを診察し、重症の患者には紹介状を書いている。患者に自分の体調を気にかけてもらうため、健康や衛生に関するアドバイスをすることが多い。現状の課題は、言語の壁や無償で提供できる薬が制限されていることである。透析室では、19台の透析機器で57人の患者に対応している。1人あたり週に3回、1回で4時間の治療を受けている。保健省は国民の食生活や健康への意識向上活動や健康診断の受診、早期治療を呼びかけている。病院内の診断センターでは、心臓病などの検査を通常より安い料金で受けることができる。



〈発見〉

マレーシアも日本も看護師が足りないという同じ課題を抱えている。看護師が少ないと、患者一人一人に丁寧なケアが行き届かなくなってしまうので、看護師を増やす為の対策を取った方が良いと感じた。多民族国家であるマレーシアと、外国人労働者が増加している日本において、医療を提供するうえで言語の壁は共通の課題となっている。

マレーシアのレストランは24時間営業でいつでも簡単に食事が取れる環境にあり、高カロリーな食事が多い為、高血圧や糖尿病になる人が多く、肥満の人が増加している。マレーシアでも日本同様に高齢化が進んでおり、その中でこのような施設があることで早期発見、早期治療ができ、健康寿命を延ばすことができるということはとても貴重であると感じた。

公式訪問記録

訪問先名称: **SMK Desa Petaling
Junior high school**

視察日時: 7月23日(水) 13時30分～17時30分 記録者: 佐野・山田

訪問先対応者: 校長: Datin Che Zaviah Binti Abdullah
(ダティン・チェ・ザヴィア・ビンティ・アブドゥラ) さん
先生・生徒・赤新月社・IFRC・ユースボランティア合わせて約100人

〈内容〉

1. 歓迎のダンス・両国の挨拶
2. 礼拝の言葉
3. 校長・団長・リーダー挨拶
4. 記念品交換
5. JRCの発表
6. マレーシア文化の体験
7. 胸骨圧迫指導
8. 日本のアクティビティ(“さんぼ”歌、“パプリカ”ダンス、“かぶと”折り紙)
9. 写真撮影・プレゼント交換・個々の交流



〈詳細〉

今回訪問したのは中等教育学校である。訪問先の学校では、年下の生徒が多く、女性の比率が高かった。

まず始めに、3曲のダンスによる歓迎があった。1曲目は「Zen Tan(怎叹)」2曲目は「tualang tiga」3曲目「Malargal ketten」で、それぞれ違った魅力を持ち、しなやかに踊る姿はとても印象的であった。

続いて、日本文化の発表では、茨城チームが「日本の学校について」、群馬チームが「伝統文化」、栃木チームが「日本のJRC活動」について、それぞれスライドを用いて紹介した。

その後のマレーシア文化体験では、6つのブースに分かれて活動した。内容は「衣装の試着」「ディババリ飾り作り」「伝統的なお菓子」「民族楽器」「カリグラフィー」「プラスチック紐を使った作品作り」「マサ・マサ」と呼ばれる体験であり、現地の文化に直接触れる貴重な機会となった。

また、胸骨圧迫の体験では、音楽に合わせて横並びになって行い、楽しみながら学ぶことができた。

最後に、日本の交流企画を行った。群馬チームは「さんぼ」を英語で歌い、茨城チームは「パプリカ」を一緒に踊り、栃木チームは新聞紙を使って「かぶと」作りを行った。茨城・群馬のメンバーも近くでサポートしながら、会場全体で盛り上がる交流の時間となった。

〈発見〉

学校訪問での交流で、マレーシアの人たちはとても日本に興味があり、かなり日本語が上手な現地の方もいて驚いた。日本を知ろうとする姿勢から、お互いに文化を知ろうとする気持ちの大切さを改めて実感し、国は違っても心で通じ合う素晴らしさを目の当たりにした。また、訪れたところは中学校だったがユースボランティアの方々含めてかなり年齢差があり、私たちの想像する青少年赤十字とは少し異なっていた。

公式訪問記録

訪問先名称:

SMKTAMANMELAWATI

視察日時: 7月24日(木) 9時00分～12時30分

記録者: 羽中田・松坂

訪問先対応者: 副校長 PN KASMA BINTI KIPRAWIさん
 加盟校の生徒、先生
 IFRCの方々

〈内容〉

1. シラットのパフォーマンス
2. 副校長・現地校の代表生徒による挨拶
3. 派遣団リーダーによる挨拶
4. 伝統料理の紹介・体験
5. 動画による現地の学校紹介
6. 現地校の生徒による伝統的な踊り、演奏の発表
7. 派遣団による発表
8. 現地の生徒によるマレーシアの文化発表
9. 閉会式



〈詳細〉

到着すると、生徒たちが伝統的な音楽に合わせたシラットのパフォーマンスで歓迎してくれた。副校長先生と代表生徒による挨拶では、「お互いの文化を理解し、尊重し合うことで明るい未来が開ける」という心温まる話を聞き、相互理解の重要性を再認識した。

伝統料理を共にしながらの交流は、互いの文化を深く理解する上で非常に有意義であった。生徒たちが作成した学校紹介動画には、日々の学習や課外活動への情熱が映し出されており、感銘を受けた。通常の教科の勉強に加え、メイク講座や建築技術についての講座など色々な分野を勉強している様子が見え、うかがえた。また、学習障害の有無や民族的背景に関わらず、一人ひとりが個性を活かして活躍している様子は、多様性を尊重する学校の姿勢を象徴しており、素晴らしかった。

JRC メンバーによる発表ではマレーシアの生徒たちが日本の文化に熱心に触れ、活発に交流している姿が印象的だった。この発表を通して文化や言葉の違いは、お互いの理解を深め新たな発見をもたらしてくれるものだと思えて感じた。特に、現地の生徒たちがバティック織りの体験や自作のグッズをプレゼントしてくれたことは、彼らの心の温かさと、異文化への関心の深さを感じさせる出来事であった。

〈発見〉

この訪問を通して、私たちはマレーシアの豊かな文化と、人々の温かい心に触れることができた。

言語や文化の違いを超えて心を通わせる喜び、そして異文化を尊重し、学び合うことの尊さを改めて実感した。彼らの熱心な姿から言語の壁を越えたコミュニケーションの可能性を強く感じた。この経験は私たちが日本の文化を一方向的に伝えるだけでなく相手の文化を尊重し一緒に楽しもうとする姿勢が大切であることを教えてくれた。私たちの視野を広げ、多様な価値観を受け入れる心を育ててくれると確信している。今回の訪問が、今後の両国の友好関係を深める一助となることを願う。

自由研究

陸の豊かさを守るために

茨城県立結城第一高等学校 松坂凜太郎

〈研究の目的・動機〉

マレーシアではごみの分別はどのように行われているのかを知り、ゴミ問題や環境問題に対して将来のために今私たちができることを考える。

〈研究方法〉

インターネットによる事前調査・現地調査・聞き取り調査

〈調査結果〉

【インターネットによる事前調査でわかったこと】

- ・ゴミ問題に関する関心は薄く、リサイクルなどの意識はあまり高くないことがわかった。
- ・現在のプラスチックの処分方法は焼却処分だが、環境汚染につながることにに対して危機を感じてることがわかった。(人体に影響を及ぼすこともある)
- ・首都はポイ捨てをしたら罰金と清掃が課せられる。

【現地調査でわかったこと】

- ・首都のクアラルンプール周辺にゴミは全く落ちていなかったが、首都を離れていくにつれて紙とプラスチックトレイなどのゴミが多く落ちていた。

【聞き取り調査によってわかったこと】

- ・現地校の生徒にゴミ問題についてどう思うか質問したところ、そこまでの関心はないと言っていた。
- ・マレーシアはより良い国にするために多くの国と環境問題について話し合っている。

〈考察〉

調査結果を踏まえて、マレーシアではゴミ問題に対する関心は薄いと考えた。マレーシアの学生たちなどが、ゴミのポイ捨てを禁止するポスター



を作成したり、国や地域が環境問題に関する関心を高めるための講座を開いたりするなど興味を持てるような機会をつくっていくと良いのではないかと思う。色々な種類のゴミが落ちていたので、月に一回ゴミ拾いのイベントを開くなどを活発に行っていく必要があると考える。

〈感想〉

マレーシアは日本と同様に、ゴミ問題について意識していると思っていた。しかし、現状のマレーシアはゴミ問題についての意識は低いと感じた。クアラルンプールにはゴミは落ちていなくて驚いた。それに対して、クアラルンプールから離れた地域では、ゴミが多く落ちていた印象だった。設備にかかる費用の格差が大きく出てしまっているのかもしれない。首都と同じくらい手をかければ、観光客も、住んでいる人も平等に安全に暮らせるのではないかと思う。

私はこの研究を通して、日本では見ることでできなかった視点で陸の豊かさについて深く考えることができた。私と同じ考えを持つ人はもちろん、別の視点を持った人もいた。このことから私は多様な考えを持って生活していきたい。

自由研究

マレーシアから学ぶ気候変動への対策

茨城高等学校 星野 世那

〈目的・動機〉

近年気候変動が大きく注目されている中で、マレーシアは赤道付近に位置する熱帯雨林気候であるため、地球温暖化の影響を日本よりも受けやすいと考え、日頃からどのような取り組みを行っているのか知りたいと思った。またその際に、多民族国家であるマレーシアにおいては言語や文化の違いをどのように乗り越えて活動しているのか疑問に思った。

〈研究方法〉

- 1 現地ユースへのインタビュー
- 2 インターネット調査

〈調査結果〉

マレーシアにある IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）では気候変動の為にユースサミットを行っていることがわかった。（今年度は9月4日から9月5日にかけて開催される）サミットでは代表者がお互いの所属している地域の赤十字社が行っている気候変動への取り組みの共有を行い、ボーイスカウト、ガールスカウトへの共有も行っている。また、Y-Adapt というツールを使用している。Y-Adapt とは Web 上にある気候変動のカリキュラムであり、学ぶだけではなく行動に移すためのトレーニングを行うものである。また自分が生活している地域だけでなく、他の地域の環境問題のトレーニングもできる事が最大のメリットとなっている。

ユースが行っているプロジェクトでは、「Safe

Steps Kids」というサイトを使った取り組みがある。これは、アニメーションやゲームを使用し、子どもたちにもわかりやすく気候変動について学ぶことができる Web サイトである。子どもたちに気候変動問題をより身近に感じてもらうためのワークショップも行われている事がわかった。このような取り組みが行われることで子どもたちも関心を持っていることを知ることができた。

〈考察・今後の課題〉

日本ではまだ、Y-Adapt、Safe Steps Kids というツールがあることが世間的に知られていない。昨今世界各地で異常気象による気候変動が各地で多発している。そのため、このツールを広げる活動を行い、世界に目を向けた気候変動への対策を考えていかなければならないと感じた。私たちが身近にできることを考え行動していく事が今後の私たちの未来に繋がるため、一人ひとりの意識と行動が重要である。

〈感想〉

今回の研究を通して、世界では様々な気候変動の取り組みが行われている事を知り、加速している気候変動の問題についてより深く考えていかなければならないと感じた。私たちの未来のために今できることは何か？世界的にますます深刻化していく気候変動。私たちはどのような対策が必要なのか？私自身も身近に始められることから一つ一つ行動に移し、少しでも私たちの未来が明るくなるよう貢献していきたい。



自由研究

チームの国際比較～学校・医療・福祉現場のデータ分析

茨城高等学校 山田隆太郎

《研究の目的・動機》

私は将来、経営システム工学・社会システムについて国際的に学び、チームを率いて問題解決に 取り組むことを目指している。今回のマレーシア研修では学校・医療・国際赤十字・赤新月者関連 施設という異なる現場で、チームがどのように協働し、リーダーがどのように決まるのか調査する ことで多様な環境におけるチームワークの実態を明らかにしたい。

《研究方法》

- ①インタビュー（医療施設スタッフ・IFRC の職員対象）
- ②観察調査（病院やIFRC でのチーム活動の場面を記録）
- ③Instagram を用いたアンケート（生徒向け）

《調査結果》

《赤新月社関連病院》

- ①今日働いているスタッフは何人で、どんな役割ですか？
→医師は1日あたり1～数名、看護師は1人（不足気味）。忙しい日はスタッフを増員。薬剤師もいるが常時ではない。ボランティア医師も交代制で診察。
- ②この施設では、どんな業務がチームで行われていますか？
→診察、透析治療、救急対応、薬剤提供、患者の紹介（大病院へ）、翻訳機を用いたコミュニケーション。
- ③チームのリーダーはどのように決められますか？
→医師がリーダー的役割を担う（指名・専門性に基づく）
- ④チーム内では、どのように情報共有していますか？
→パソコンで患者の履歴を管理。口頭や翻訳機も使用。
- ⑤チームメンバー同士は1日にどれくらい連絡や話し合いをしますか？
→午前9時～13時の診察中に頻りに情報共有。患者数に応じて柔軟に対応。
- ⑥良いチームワークに必要なと思うものは何ですか？
→信頼、支え合い、役割分担の明確さ、言語の壁を補うコミュニケーション。
・無料または非常に安価で診察・薬を提供する。
・国籍を問わず利用可能。
・主な症状：皮膚疾患、感染症、呼吸器症状、下痢、メンタルケア。
・1日の患者数：5～20人程度。
・長期治療は難しく、大病院への紹介が必要。
・透析：週3回、1回4時間、19台稼働。約58人が治療中。高血圧・糖尿病由来が多い。
・救急車：GPS管理、1日3～4回出動、日本からの寄贈車両あり。
・災害時：洪水被害に対応するが、都市と地方で格差あり。

《IFRC》

- ①この施設では、どんな種類のチームが活動していますか？
→災害支援チーム、医療支援チーム、地域サービス、ボランティア組織。
- ②1チームには通常何人いますか？
→5～10人規模が一般的。
- ③リーダーはどのように決められますか？
→立候補、経験に基づく選任、交代制。IFRC 全体では立候補+選挙で会長や委員を決定。
- ④チーム内では、役割はどのように分けられていますか？
→調整役、連絡係、医療担当、ロジスティクスなど。
- ⑤チーム内ではどのくらいの頻度で話し合いや連絡を取りますか？

→Weekly meeting（週1回）、必要に応じて活動前後に随時。

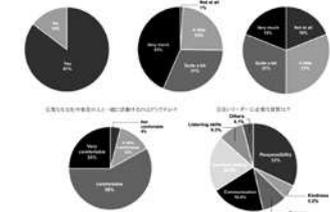
⑥この施設でのチーム協働において、最も大事なことは何だと思いますか？

→コミュニケーション、柔軟性、リーダーシップ、信頼。

⑦多民族国家でありながらどのようにして、チームとして動いているか

→多国籍・多民族チームでも、共通の人道支援ミッションを共有。IFRC 本部・地域事務所・支部・ボランティアが連携。ボランティア訓練を通じて共通理解を形成する。

《現地校》77人に調査



《結果 考察》

【現地校】

- ・多くの生徒が「チーム活動は好き」（74%が Quite a bit～Very much）と答えており、協働への意欲が高いことが分かった。
- ・一方で「自分はリーダータイプ」と思う割合は50%にとどまり、リーダーを担いたい人と実際に必要とされるリーダー資質の間にギャップが存在している。
- ・良いリーダーの資質では「責任感」「決断力」「伝える力」が高く評価され、特にリーダーには積極的な行動力と責任感が重視される傾向が見られた。

【医療施設】

- ・医師が自動的にリーダーになる構造が見られた。これは専門知識や社会的役割が強くリーダーシップを規定しているといえる。
- ・言語や文化の壁を越えるために翻訳機を使うなど、実用的な工夫を通じたチームワークが特徴的だった。
- ・役割分担と協働の重要性が強く意識されていた。
- ・多国籍・多文化のメンバーが協働する中で、共通の目標（人道支援）をもとに結束している点が際立っていた。
- ・リーダーは立候補や選挙で決定されることもあり、参加型・民主的なリーダーシップのあり方が確認できた。
- ・「柔軟性」「信頼」「コミュニケーション」が重要視され、組織的なトレーニングを通じて多様性を乗り越えていることが分かった。

▶学校・医療・国際機関という異なる現場での比較から、リーダーシップの形は大きく異なるが、共通して「責任感・信頼・コミュニケーション」が核となっていた。特に異文化環境では、固定的なリーダー像よりも、状況に応じて役割を切り替える柔軟さが必要とされることが明らかになった。

《感想》

今回の調査を通じて、「リーダーは特別な人だけがなるものではなく、状況や役割によって誰もが担いうるもの」であることを実感した。自分自身が将来国際的な場でチームを率いるときには、強い決断力と同時に、謙虚さ・柔軟さ・異文化理解を持つことが重要だと学んだ。現地校での調査は「理想のリーダー像」を可視化し、医療や国際機関の調査では「実際のリーダーシップのあり方」から、両方をつなぐ視点が得られたことが大きな収穫である。

自由研究

現地の方の意見から交通事故事情を考える

清真学園高等学校 吉成侑希子

〈研究背景〉

日本では人口 10 万人あたり 2.59 人が、マレーシアでは人口 10 万人あたり 22.5 人が交通事故で死亡している。

そこで私は、同じ交通事故という原因で死亡している、国が異なれば要因の構造が異なると考え、本研究を行った。

〈研究目的〉

交通事故による死亡は極めて残念であり避けるべき事態である。本研究により得られるデータを基に両国における交通事故死亡率の更なる低減に役立てたい。

〈研究方法〉

マレーシアにて訪れた赤新月加盟校の生徒の中で、SNS アプリ「Instagram」を交換した 32 人に DM にてアンケートを実施した。

アンケートの内容は

- Q1 マレーシアでは日本よりも自動二輪車の方が多く使われていると思うか
 Q2 マレーシアでは交通事故が多いと思うか
 Q3 交通安全について小学生や子供の時に学んだか
 Q4 日常生活で路上において危ない経験をした事があるか
 Q5 学校へ行く交通手段は何か（通常時）
 Q6 学校へ行く交通手段は何か（雨の日等の変則的な交通手段）（複数回答）である。

〈調査結果〉

Q1 の調査では 97% が Yes と回答し、3% が Neutral と回答した。実際、自動二輪車普及率を見ると日本では 12,0 人に 1 台、マレーシアでは 2,3 人に 1 台普及している。このことからマレーシアでは日本よりも多く自動二輪車が使われている。

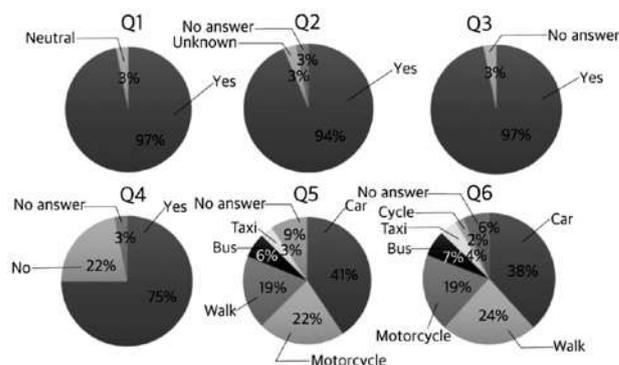
Q2 の調査では 94% が Yes と回答し、3% が Unknown、3% が No answer であった。公式統計によると、交通事故で 1 時間 56 分に 1 人が命を落としていて、約 50 秒に 1 回交通事故が発生している。このことからマレーシアでは交通事故が多く発生している。

Q3 の調査では 97% が Yes と回答し、3% が No answer であった。マレーシアでは小学生の

時に交通事故の原因について記載してある「pendidikan keselamatan jalan raya」という本が配られ、交通安全について学ぶ。日本とマレーシアでは、子供の交通安全意識向上の為の取り組みに大きな差は無い。

Q4 の調査では 75% が Yes と回答し、22% が No と回答し、3% が No answer であった。具体的には、道路を横断中に信号無視の自動二輪車に轢かれそうになったが友達が引っ張ってくれた為助かったという事例などがあつた。

Q5 と Q6 の調査では通学手段の第 2 位に自動二輪車が入っており、マレーシアでの通学に多く使われている事が分かる。日本もマレーシアも自動二輪車の免許取得は 16 歳からで、免許の取得条件に大きな差は無い。しかし日本では、高等学校在学中の自動二輪車免許取得を校則で禁止している学校が多い為、自動二輪車を使用して高校へ通学している人は全体の 0.8% である。一方マレーシアでは、道路渋滞が多いが自動二輪車は渋滞を抜ける事が出来るため学校に遅刻しない為にも、通学に自動二輪車を利用する人が多い。



〈考察〉

マレーシアでは交通事故が多い。そして、国民の多くが自動二輪車を利用している為、自動二輪車による事故が多い。

また、アンケートを行った生徒からは、交通違反を厳しく取り締まりして欲しい、壊れた信号機や道路を早く直して欲しい、などの多数の意見を聞かせて頂いた。

日本よりも自動二輪車について多く道路交通法を定めれば、事故等、道路における危険を防止する事に繋がると考察する。

自由研究

多文化社会における食の提供方法

常総学院高等学校 村野 杏

〈研究の目的・動機〉

マレーシアは、イスラム教を始めとして、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教等、様々な宗教を信仰している人々がいる。そのため、それぞれの宗教によって食に対して制限がある。

一人ひとりを尊重するために、どのような形で食が提供されているのか、どのように多文化共生をしているのかを学びたいと思ったから。

〈研究方法〉

スーパーやレストラン、病院など食を提供する場で、実際にどのように販売されているのかを見たり、お話を伺うこと。

〈調査結果〉

(現地調査)

・私が行ったスーパーでは、イスラム教で禁じられている豚肉は販売されていなかった。牛肉や



ラム肉、魚が主だった。また、スーパーの多くの商品のパッケージにイスラム教で食べることが許されている食べ物として、ハラール認証マークというものがつけられていた。さらに、日本でもよく見かけるふりかけやお菓子なども売られていた。



・私が泊まったホテルの朝食では、マレーシアの伝統的な食べ物だけではなく、中国発祥のごま団子や春巻き、チャーハンのほか、タイ発祥のトムヤムクン、さらにベジタリアン向けのセクションもあった。

・また、私が行ったビュッフェスタイルのお店では、スイカやオレンジなど、日本人のおなじみのフルーツもあった。

・病院で提供される食事は、基本的にはハラール食品であるということが分かった。

〈考察〉

・マレーシアでは、スーパーや病院などにおいて、大半の人々が信仰しているイスラム教に配慮している。

・一部のレストランなどでは、中華系やインド系の料理のほかに、動物由来のものを食べられないベジタリアン向けの料理も提供されている。

→このように、マレーシアに住んでいる一人ひとりを尊重して、すべての人が食事を取れるような工夫がされている。

〈感想〉

今回、私は5泊6日の食事で、中華料理・飲茶料理・インド料理・西洋料理・ニョニャ料理・スチームポート料理などを体験した。

この前提にあるのは、これらの料理を提供するお店があるということだ。

人々が、それぞれ異なる宗教を信仰し、複数の国にルーツを持つ方がいるからこそ、そのような多くの料理を提供する場所があるということが分かった。

私は実際、初めて食べる料理も多かったのだが、様々な料理を味わうことができ良かったと思う。

世界には自分の知らない食べ物や料理がもっと多く存在していると思うと胸が高鳴る。

将来、私は、いろんな国でその地域に根づいた料理を食べてみたいと思う。

自由研究

マレーシアの宗教と生活文化について

栃木県立栃木女子高等学校 田辺 紬

〈研究の目的・動機〉

マレーシアでは日本と比べ、多宗教の意識が高いとわかったため、それが生活にどのようなつながっているのかを知りたいと思ったから。また、日頃の生活でどんなことに気をつけているのかも学びたいことから、このテーマにした。

〈研究方法〉

現地視察、現地の方へインタビュー、書籍

〈調査結果〉

イスラム教、ヒンドゥー教、キリスト教、道教、シーク教にわけられることを知った。また、多民族の生活は、植民地時代が大きく関わっていた。元は、マレー系の人々の土地だったが、イギリスがマレーシアを植民地にしたことで、中国人やインド人が来て働き始めた。今から数百年ほど前、マレーシアの独立が決まりイギリスの統治が終わった後も多民族での生活が続いているという歴史を学んだ。共に生活していく中で、異なる部分があってもお互いに理解し気持ちとして表現したりしない。異なる民族でも人として平等に扱うことで平和に生活できていることがわかった。また、そのような環境下のため、普段から文化的差異による争いなどもしないことも知った。

食事についてはハラールとノンハラールに分けられている。イスラム教徒が食べるのはハラールであるため、学校でも分けられている。また、マレー系の人々は異なる宗教の施設などに行かないようにするなど行動を徹底しているとのことだった。インタビューの最後には、宗教関係なくお互いの宗教を尊重し、他の人も多民族・多宗教の中で生活して



いることに変わりはない。人それぞれのやり方を許し合って仲良く過ごしていると教えてくださった。

〈考察〉

日本は今、グローバル化が進む社会になっているため、マレーシアの人々の精神というものが手本になる。グローバル化という世界の流れを前向きに捉え、多くの国籍・民族に関わる社会の中で、自分がどのようなコミュニケーションを取るのかを考えられる社会を目指していくべきだと思った。

〈感想〉

普段の学校生活で相互理解や共生社会についての話は耳にするが、実際に多国籍・多宗教の環境で生活することがない状況で想像するのは難しかった。しかし、この派遣を通して、相互理解や共生社会というものがどういうことを表しているのかを学ぶことができた。国境を越えて、言語の違い、文化の違いをお互いに知ることによって今まで知らなかった世界というのが見えてきた。日本は単一民族国家であるため、多民族・多国籍国家であるマレーシアに行くことができたというのは貴重であり、今回の経験は私にとって宝となった。

これからの人生で、大学に進学したり働いたりしていく中で、一人暮らしや職場で出会う人とお互いのことを知り理解し合う、欠点を補い合う関係性を築けるような人になりたい。そして、今回のマレーシアでの経験を多くの人に広めることで私の経験はさらに良いものになるだろうと思う。異文化共生の先駆者のような存在を目標に、これからも積極的に行動していきたい。

自由研究

交通機関の違いとは

栃木県立真岡女子高等学校 田中 美結

〈研究の目的・動機〉

私は、日本で外国人による交通事故が増えているというニュースを見たことをきっかけに、本テーマについて関心を持つようになった。マレーシア出身の外国人が関与する交通事故の背景を調べていく中で、日本とマレーシアの交通機関の違いが大きな影響を及ぼしているのではないかと考え、今回このテーマを選んだ。

〈研究方法〉

インターネット、現地調査



〈調査結果〉

マレーシアは公共交通が都市部に限られ、多くの人々がバイクや車で移動していることがわかった。ガイドの話によるとマレーシアでは原付はほとんど利用されていないらしい。バイクの普及率が高く、バイク専用の道路があるほど通勤・通学・買い物など日常的に利用されている。バイク専用の道路は車やバスとの接触事故を防ぐことを目的としており、休憩所を設けてあるところもある。しかし、バイクは細いため車やバスを抜かして先に進むドライバーが多く見られる一方、日本では歩行者優先や一時停止の徹底など、厳格な交通ルールが存在している。

このような違いから、マレーシア人が日本でバイクや車を運転する際、日本特有のルールや道路環境に慣れておらず、事故を起こすリスクが高まっているようだ。

〈考察〉

マレーシア人が日本で事故を起こしやすい背景には、交通文化の違いが大きく影響しているのではないかと考えた。たとえば、マレーシアでは信号無視やスピード違反、逆走が多いデータがある。一方、日本では交通マナーが厳しく守られている。また、日本では左側通行であることや、道路標識が日本語中心であることも、外国人にとっては混乱の原因であると考えられる。

さらに、マレーシアでバイク運転に慣れている人が日本でも気楽にバイクを利用するケースがあるが、日本の道路は幅が狭く、交通量も多い。また自然環境の違いによる混乱も事故につながる危険がある。外免切り替えの試験の難易度を高くすることや、交通ルールを事前に学べる教材の整備など、具体的な対策が必要である。

〈感想〉

今回の自由研究を通じて、交通事故は単なる個人の不注意ではなく、文化的背景や生活習慣の違いによっても引き起こされることを改めて実感した。日本社会が今後さらに多国籍化していく中で、外国人にとっても安全で分かりやすい交通環境を整えることが重要だと感じた。異文化理解は、交通安全の面からも必要不可欠であることを学ぶことができた。



自由研究

マレーシアの救急車に関する救急医療について

栃木県立宇都宮高等学校 宮本 歩夢

〈研究の目的・動機〉

マレーシアについて調べていたところ救急車の運営のされ方が日本とは異なるところが多いことがわかった。マレーシアの救急車について日本の救急車と比較し、良いところや課題を発見する。

〈研究方法〉

インターネット、マレーシア赤新月社の方へのインタビュー、見学、google フォームを用いた現地の学生へのアンケート

〈調査結果〉

今回現地で話を聞いたのは RedCrescent の救急車についてである。そこには 15 台の救急車があり、訪問した時には 2 台の救急車がホットスポットとして、出動していた。ホットスポットとは救急車が要請されてからすぐに現場に行けるようにマレーシア市内に救急車が待機することである。「999」で救急車を呼ぶと、まず中央病院に電話が行き、救急車を運営する団体のどこかに要請がくる。RedCrescent ではそこから現場に近いホットスポットの救急車に出動させたり、直接出動させたりする。日本とは異なり、Red Crescent が救急車を所有し、運営している。また、イベントがあるときにはその対応も行なっている。救急車の到着平均時間は 30 分ほどで、診察を受けるまでの時間は 1 時間ほどである。また、アンケートでは「日本では、救急車の不適切な利用が増えているという問題がありますが、マレーシアには救急車に関する課題はありますか？」という質問に対し、58.3% が無い、33.3% がどちらでもない 8.3% がある、と答えた。救急車を利用した人にそのときの症状を尋ねたが、日本とは変わらなかった。

〈考察〉

日本の救急車到着平均時間およそ 10 分と比べてマレーシアの到着平均時間が 30 分と遅くなっていることの原因は主に交通によるものであると思う。マレーシアは車やバイクの交通量が多く救急車の到着がこのような時間になっているのではないかと考えた。しかし、ホットスポットという仕組みはマレーシアの交通状況に対応できる良い仕組みとなっている。また、救急車の利用について日本では今まさに不適切な利用が原因となり、年々救急車の到着時間が遅れている。日本でこのようなことが問題になっているならば、他の国でも医療の発達に比例し同様の問題があると予想したが、実際はそうではなかった。確かに、日本の救急車は速く衛生や医療の充実は他国と比べても高いとは思いますが、やはり日本人としてらしからぬ行動をとってしまう人が多い現状となっている。



〈感想〉

マレーシアの救急車について話を聞いたり、調べたりする中で実際、日本の救急は救急車の到着時間などにおいてとても充実していることが分かった。しかし、日本とマレーシアでは救急車の利用についてマレーシアの方が問題を感じている人が少ない。このことから救急車の利用などの面から日本の救急車についてよりよく改善し、さらに充実させることができると思った。マレーシアの救急から学んだ今回の研究のように日本の医療も改善されることを願っている。



自由研究

マレーシアの防災教育について

栃木県立小山西高等学校 深津 もこ

〈研究の目的・動機〉

環境問題について日本とどのような違いがあるのか興味を持った。調べてみると、マレーシアでは洪水被害とヘイズが多いことがわかった。そこからどのような防災教育が行われているのかを知りたい。そのような被害にはどのような対策がされているのか興味を持った。

〈研究方法〉

インタビュー、現地視察、インターネット

〈調査結果〉

〈インターネットでわかったこと〉

ヘイズとは、特に東南アジアで問題となる煙害で、大気汚染による健康被害や視界不良を引き起こす可能性がある。ヘイズでの被害は都市部で多く発生しているが、その度に医療機関の方で対応しているということが分かった。



マレーシアでは、雨季と乾季の差が激しく、スコールなどの影響から洪水被害が多い。

〈現地視察でわかったこと〉

○防災について

道路などでの洪水被害防止策は見当たらなかった。

○環境について

都市部で見た川は汚れていて、生臭いような匂いがあった。

〈インタビューでわかったこと〉

○防災について

私たちが関わってきた赤新月社に携わる人たちが、学校内で赤新月クラブのようなものに所属していると、救急法や防災訓練を経験できることが分かった。しかし、それらに該当しない人々は防災訓練を経験していない。学校内でも防災教育はしていないとのことだった。

○洪水被害について

街の中で洪水が起こってしまった時の対応についても、都市での対応は比較的早い。地方では移民が多く、言語や文化の壁から理解してもらえ

ず、対応が遅くなってしまう。マレーシアは被害が起きてから行動することがおおく、道路や川の近くには洪水被害を防止する為の工夫はまだされていないということも分かった。そのような現状から、IFRCの方々はマレーシアの防災について更なる工夫が必要だと考えていた。

〈考察〉

学校での防災教育や地区での防災訓練も行われていないことは、被害が拡大してしまう要因であると考えられる。マレーシアではこれから、さらに災害への危機感を持たせるために洪水被害の避難訓練を積極的に行う必要がある。また、日本でも洪水被害に備えた避難訓練も行うべきだと思った。



そして、災害時に川の濁った水が街に溢れた場合、健康被害も増えてしまうと考えられる。そうならないために、川の衛生管理を徹底していく必要がある。



そうならないために、川の衛生管理を徹底していく必要がある。

〈感想〉

私たちは赤新月社を訪問しているときにスコールに遭遇した。地球温暖化の影響でスコールの頻度がさらに増えていると聞いたときに、日本とはまた違う気候変動への危機感を感じた。そして、日本ではかなり多くの地区や学校で防災教育、防災訓練を行っているが、マレーシアではあまり防災訓練を受けることがないということを知った。災害は起こってから対応では間に合わないことも多い。マレーシアでは地震が少ないため、かなり高さのある建物が連なっていたが、そこで日本の建築の安全基準の高さや工夫を肌で実感した。

これから、世界では自然災害が増えていくと考えられている。全ての国が「防災」に着目して訓練を受けられるような仕組みを考えていくべきだと感じた。

自由研究

マレーシアの建築設計と日本との相違

栃木県立小山城南高等学校 佐野琥太郎

〈研究の目的・動機〉

将来は建築関係の職に就きたいと考えている。日本は地震が多く、耐震性に優れた建築設計をしている。しかし、マレーシアは地震が少ない反面、熱帯気候なので気候災害が多いと予想した。日本と異なる災害に対する建築の工夫や生活洋式の違いについて研究したい。

〈研究方法〉

見る・触れる→疑問の発見・考察→聞く・調べて解決のサイクル

〈調査結果〉

病院などの重要な役割を担う建物は洪水対策で地形の高いところに建てていた。また、石造建築であった。石造建築は風化・劣化に強く、スコールなどへの対策であると分かった。また耐火性・耐熱性に優れており、猛暑から室内を守る役割も持っていることを学んだ。

ピンクモスクという礼拝堂では、ドーム型建築が採択されている。ドーム型の利点は音を反射し、集中させやすいため、音響がよくなる。また、屋根のために柱を作る必要がないためデザイン性にも優れている。さらに、柱崩壊型という柱の問題による災害が発生しない点も魅力的だと思った。

学校建築の違いも多く見受けられた。日本の学校は機能的な設計で、鉄筋コンクリートを用いた頑丈な設計をしていた。対してマレーシアの学校



は柱が細く、開放的で風通しのよい設計をしていた。他にも生活に使う建物の高さにも違いが見られた。現在の日本で一番高い建築物は森JPタワー330mだが、マレーシアはツインタワーやムルデカ118といった最大約680mもの高さのある建築物が建てられていた。これは地震が少なく航空法の規制が緩いためだと学んだ。

〈考察〉

発展の仕方として日本は全国的に水準が高いのに対し、マレーシアは高層ビルが立ち並ぶ場所もあれば荒地もあるといったようだった。これはマレーシアが観光業に力を入れていて、経済力を象徴するためだと考える。また、玄関ドアが内開きな

のも靴を脱ぐ習慣がないため内開きでも不便がないからである。郊外の民家の屋根は瓦やトタン・ブリキが多く見受けられた。瓦は重いため暴風雨への対策であり、トタン・ブリキは錆に強いので雨や多湿への対策である。



自由研究

マレーシアの様々な施設は言語、宗教の壁をどのように乗り越えているのか。

群馬県立高崎北高等学校 丹羽 稀咲

〈目的〉

日本は超高齢社会であるとともに、労働者不足が深刻になっている。私は外国人労働者の受け入れに対してさらに積極的になるべきだと考えるが、現在の日本は外国人を受け入れる体制が整っていないことに気づいた。そこで、多種多様な民族が共存するマレーシアで日本に足りていないことやマレーシアで行われている工夫を調べる。

〈研究方法〉

現地でのインタビュー
現地視察

〈結果〉

【医療関係者へのインタビューでわかった医療機関での工夫】

- ①診療を行う中で言語障害が時々起こってしまう。そのような時は Google 翻訳を使って意思疎通をしている。
- ②入院している人などへ食事を提供するときには、イスラム教徒にはハラール食、ヒンドゥー教徒には牛肉を避けた食事など、それぞれの文化や宗教にあわせている。
- ③入院している人々や一日中働く人々も祈りを捧げることができるよう、病院には必ず祈祷室がある。

【学生へのインタビューでわかった学校での工夫】

- ①授業は文化の違う人々も一緒に受ける。マレーシアは複雑な歴史が多くあるが、歴史の授業でも他の授業と同様、多様な歴史的背景をもつ民

族がともに学習する。授業で宗教について学ぶ際にはあらゆる宗教を尊重するよう教えられる。

- ②生徒たちの交流機会が多く設けられている。そのような機会は生徒に文化によって異なるボディランゲージへの注意力やコミュニケーション力を身につけさせることができる。

〈考察〉

病院では患者さんにあわせた環境づくりを徹底し、学校では交流機会を大切にする事で文化や宗教の壁を乗り越えていた。また、言語の壁は病院では翻訳機を利用することで乗り越え、学校では普段から英語でコミュニケーションをとることや幼いころから様々な言語に触れさせることで乗り越えていた。このことからマレーシアの施設全体をみてもコミュニケーションをとる場をつくることや民族にあわせた細かな配慮、他文化に触れる機会をつくるのが言語、宗教の壁を乗り越えるために大切であると考えた。

〈感想〉

多民族国家であるマレーシアで行われている工夫はどれも他者のことを考えたものばかりであった。今回調査し学んだことを環境の違う日本の社会へ今すぐ取り込むことはきっと不可能だろう。しかし相手のことを考え、行動することは今すぐにでも行える。人々の行動意識を少しずつ変えていくことが、日本で多文化が共存する社会をつくることに役立つのではないだろうか。



自由研究

マレーシアの災害や備蓄への意識調査

群馬県立渋川女子高等学校 小林 咲穂

〈研究の目的・動機〉

日本は地震や集中豪雨などの災害が多く、近年備蓄食料を用意する家庭が増えている。

マレーシアは、モンスーンや集中豪雨による洪水などの災害が頻繁に発生している。マレーシアでの備蓄食料やどのような災害対策をしているのか調査・研究したい。

〈研究方法〉

- ・病院施設訪問時に質問
- ・Instagram を通して、学校訪問で交流した学生に質問
- ・派遣前に前橋赤十字病院へ、災害時の備蓄食料等の状況を質問

〈調査結果〉

(訪問先の病院からの情報)

- ・マレーシアの病院は、建設前に土地の災害被害調査をし、被害が少ない場所に建てる為、食料は備蓄していない。洪水が起きても被害を最小限にする為に、透析機器などの機械類は1階には置かないようにしている。

(学校訪問で交流した学生達からの情報)

- ・マレーシア西側の災害が少ない地域でも、災害への不安は多くの人を持っている。しかし、それらの地域の学校は防災教育がなく、家庭では食料を備蓄していない。
- ・マレーシア東側の災害が多い地域では、災害への危機を常に持ち、学校で地震などの緊急時対応や避難方法、非常用品の準備を学び、最近では政府もキャンペーンなどを行い防災意識が高まっている。また、家庭では缶詰やインスタントラーメン、ビスケットなどの長期保存食料と水を3日分備蓄し、懐中電灯や救急箱も常備している。ハラール認証を受けた災害用非常食も数多く販売されている。

〈考察〉

日本もマレーシアも自然災害が多く防災意識は高まっているが、マレーシアの西側では防災教育や備蓄食料の準備の必要性の認識がない。災害が少ない地域でも防災教育を行い、防災対策への関心を持つ事が重要であると考えられる。

訪問したマレーシアの病院では備蓄食料を用意

していない。一方、前橋赤十字病院に災害時の備蓄食料について問い合わせたところ、患者と職員の3日分の食料として約9000食と水は1人1日1.5L分を備蓄している。マレーシアでも予期しない災害や物流の遅れに備えて、備蓄食料を用意しておくことが大切だと考えられる。マレーシアではハラール認証を受けた非常食が数多く販売されている。前橋赤十字病院は、宗教への配慮をした非常食はなく、国際化が進んでいる日本の病院においても、ハラール認証を受けた非常食を今後は用意した方が良いのではないかと考えられる。

〈感想〉

災害への備えは、日頃の意識と行動が重要であると改めて感じた。家庭での備蓄食料をもう一度見直し、災害に万全に備えたい。日本全土で防災教育があるが、マレーシアは地域により差があり、全体的に日本の方が防災意識は高いと感じた。学校で防災教育を受けるか受けないかで、防災意識は変わってくる為、日本は継続的な防災教育が今後さらに必要だと思う。



自由研究

多文化国家マレーシアから学ぶ～共生社会の実現に向けて～

太田市立太田高等学校 羽中田桜花

〈研究の目的・動機〉

多民族国家であるマレーシアでは、異なる文化や背景を持つ人々がどのように共存しているのかを現地の方の様子や会話を通して学び、理解を深め、多文化理解の本質を探求したいと考えた。

〈研究方法〉

インターネット、インスタグラムを活用したアンケート、現地での視察

〈調査結果〉

マレー系、中華系、インド系など複数の民族が共存しているマレーシアでは学校や職場、食事の場面などで色々な文化に触れる機会がある。多文化理解を深めるために大切にしていることについて、多くの回答者が共通してあげたのは、尊重と理解の重要性だった。批判せずに相手の話を聞き、異なる文化や価値観を理解し、受け入れる姿勢が不可欠である。また、オープンマインドを持つことの重要性も強く示された。物事を自分と違うという視点だけで判断するのではなく、むしろそれに好奇心を持ち、より深く知ろうとする姿勢が偏見を持たないための鍵であるという回答もあった。さらに、包括性と寛容性も重要な要素として挙げられた。包括性については、学校のグループ活動において他の人種の友人も積極的に受け入れることや、偏見を持たずに誰にでも平等に接することが例として挙げられた。寛容性とは、何かを受け入れる能力や覚悟であり、たとえ自分の意見と違ってても、他者の存在を認めることが大切である。

〈考察〉

今回の調査結果から、多文化理解とは単に知識として文化や習慣を知る事だけではなく、相手を個人として尊重し、心を開いて対話する姿勢そのものであると強く感じた。日本で生活していると、多くの場合、同じ文化の中で育った人々と関わる機会が多

いため、無意識のうちに特定の価値観や習慣を当たり前だと捉えてしまう事がある。しかし、マレーシアでの経験は、その当たり前を問い直す貴重な機会となった。異なる文化を持つ人々が、それぞれのアイデンティティを保ちながらも、共通の社会を形成している姿は、多様性を受け入れることの重要性を示している。近年、日本社会でも外国人労働者や留学生が増え、多様な文化を持つ人々が身近な存在になりつつある。マレーシア派遣で培った尊重とオープンマインドの姿勢は、日本における異文化コミュニケーションの場でも大いに役立つだろう。相手の文化や習慣を一方向的に判断するのではなく、まずは好奇心を持って話を聞くこと。そして、相手を個人として尊重し、対話を通じて理解を深めていくことが、多文化共生社会の実現に向けた第一歩になると確信している。

〈感想〉

今回のマレーシア研修は、私の価値観を大きく変える貴重な経験となった。この研修で一番心に残っているのは現地校の生徒たちとの交流だ。それぞれの民族衣装を着た生徒が踊りや歌、楽器、挨拶などで温かく私たちを迎え入れてくださった。SNSを通じて、国境を越えた友人から直接多文化社会のリアリティを学ぶことができたことも大きな財産の一つだ。初めは言語の壁や文化の違いに不安を感じていたが、実際に交流してみると、互いのことを知りたいという気持ちがあれば、言葉は補助的なツールに過ぎないということを実感した。この研修は、国籍や文化を超えた人たちとつながりを築くための架け橋となり、私に多文化理解の入り口を開いてくれた。この経験を忘れずに、これからも多様な人々と積極的に関わり、視野を広げていきたいと思う。



自由研究

多文化多民族国家であるマレーシアにおける共生のあり方

明照学園樹徳高等学校 太田 いと

〈研究の目的・動機〉

多文化多民族国家であるマレーシアでの共生のあり方について興味があったこと。そして日本でも国際化により様々な文化背景を持つ人々と共に暮らす社会が広がっていると考えたため。

〈研究方法〉

インターネット調査
現地での聞き取り・視察

〈調査結果〉

現地の方々のお話、インターネットでの情報収集を通してマレーシアの民族はマレー系 55%。中国系 25%。インド系 10%と多民族国家であるとわかった。どの民族の方であってもそれぞれが自然体で生き生きと生活していたことが印象的だった。現地で働いている日本人の方によると、マレーシアでは自分たちの民族の行事をお祝いするのはもちろんのこと同僚や友達などの民族のお祝いをすることもあり、食事も同じようにお互いのものを食べ合うことがあるそうだ。

〈考察〉

マレーシアの方々にとって民族・宗教などの違いは生活していく上で「越えることのできない壁」にはなっていない。あくまでその人のことを表すほんの一側面に過ぎないと捉えている。日本のように民族・宗教を敬遠する傾向は感じなかった。現地校の生徒によると学校で日本語を学ぶ授業を選択できるそうだ。日本では学校で英語と日本語以外を学ぶ環境は整っていない場合がほとんどだ。しかしマレーシアでは様々な言語を学ぶ機会がある。このような環境のもとで幼い頃から生活をしていくからこそ、多文化理解は進んでいるのだろうと感じた。

〈感想〉

実際に目で見て耳で聞くことで、より深くまで知り、知識を深めることができた。日本とマレーシアでは民族・宗教への捉え方が異なっている。マレーシアの民族・宗教を尊重していく姿勢は幼い頃からの教えの賜物である。日本ではまだまだ課題が多く今すぐ受け入れていくことは難しいだろう。しかし民族・宗教への敬遠を減らす、無くしていくことが多文化理解への一助になるのではないだろうか。



自由研究

歴史から学ぶ ～現代とのつながり～

群馬大学共同教育学部附属中学校 関口奈々美

〈研究の目的・動機〉

1963年に現在のマレーシアになった、比較的新しい国。そんなマレーシアは1965年までにどのような出来事が起こり、なぜ現代のマレーシアは多民族国家になったのかを調べ、これからどのように多文化共生をしていくべきかを理解し、考えるため。また、マレーシアは親日国としても知られているので、日本とのつながりを見つけ、なぜ数年で大きな成長を遂げる事ができたのか学ぶため。

〈研究方法〉

本、インターネット、インタビュー、ヒアリング、現地視察

〈調査結果・考察〉

〈発展について〉

豊富な天然資源、安定した政治・社会情勢、整備されたビジネス環境、積極的な外資誘致政策、そして若年層の人口増加と市場の拡大などが発展の要因となっている。特に、ASEAN市場の中心という地理的優位性や、デジタル化推進政策によるIT産業の成長も発展を後押ししていた。実際に、首都のクアラルンプールは高層ビルに包まれている事やマレーシアの街中にある街頭には「ASEAN Malaysia2025」のロゴがたくさんあるの街頭にあった事から、地理的優位性で物流拠点になっていると感じた。そして、マレーシアは多民族国家の影響でたくさんの言語が広く使用され、多様な文化があるため、IFRC社では色々な国の方々が進んでいて、外国の方でもビジネスや生活がしやすい環境だと感じた。

反対に、まだ未発展な部分もあり、交通渋滞や環境悪化、インフラの課題、生活水準の低さなどが挙げられる。この派遣期間中にも、交通渋滞やインフラ整備の遅れを目の当たりした。例えばインフラ整備の遅れでは、トイレの近くに水の入ったバケツが置いてあり、その水を使って自分で流すという場面があった。

〈多民族・多言語・多宗教国家について〉

当時のイギリスは拡大する植民地の開発に大量の労働力を必要としていたため、中国大陸からの移民の需要は高く、大勢の中国人やインド人を移民として受け入れた。その結果、多民族、多言語、多宗教国家として知られるようになった。公用語は

マレー語で、英語、中国語(北京語、広東語、福建語など)、タミル語なども広く使われている。民族はマレー系、中華系、インド

系の主要な3民族に加え、先住民や混血グループも存在する。宗教はイスラム教を国教としながらも、仏教、キリスト教、ヒンドゥー教など様々な宗教が信仰されている。このようなマレーシアでは、お互いに尊重し合う社会を形成しているので、国民同士の争いは少ない。

言語について気がついた事は、派遣中に市内施設で訪れた、セントラルマーケットのお店に売っていた新聞紙が、マレー語・英語・中国語・タミル語の4つの言語で発行されていた。内容も言語ごとに少し異なる部分があると気づいた。

〈日本とのつながり〉

マレーシアは独立国になり、発展するのにあたって様々な政策を行った。中でも、1981年にマハティール首相が提唱した「東方政策」は日本や韓国の経済発展を参考に、マレーシアの経済成長と工業化を促進する事を



目的としたマレーシア独自の政策を行い、発展をした。日本は東方政策の実施を積極的に支援し、日本のODA(政府開発援助)による協力も行われた。この政策により、多くのマレーシア人が日本に留学・研修し、人的交流と相互理解が深まった。

〈まとめ〉

マレーシアでは、独立してから東方政策などの政策を通して発展を遂げ、多民族・多言語・多宗教国家の中でも人々が暮らしやすいように、お互いに尊重し合い、否定しない事や様々な言語を使用するなどの工夫をして、生活環境を整えていた。

しかし、発展の反対には環境汚染や生活水準の低さ、インフラの整備が不十分などの課題も挙げられる。



マレーシアに行って気付いたこと・考えたこと

茨城県立結城第一高等学校 2年 松坂凜太郎

マレーシア研修で赤新月社本社を訪れました。そこでは災害時の支援や違法で流れ着いてしまった人たちの支援を主に行っていて、またコロナのときに日本から提供された救急車が使用されていたものを見学しました。また、マレーシアの文化や宗教についても学びました。マレーシアは多くの宗教があるため、それぞれの宗教によって服装や食事のルールなど大きく異なることを知りました。

次に赤十字病院を訪れました。主に2つのところを見学しました。1つ目は、貧困の方々が無償で受けられる診療所で、日本にはない無償で診察してもらえるということを知ったときとても驚きました。2つ目は透析治療を集中的に行う部屋で、糖尿病など生活習慣病による病気で透析治療を受けている人が多くいました。ある一人の患者さんは私たちに「生活習慣病にならないために食事のバランスなどには気をつけておいたほうがいいですよ」と言ってくださり、健康についてより深く考えることができました。

赤十字加盟校を訪問したとき、みんなが温かく私たちを迎えてくれました。伝統的な舞踊や遊び、食事など様々な文化を肌で感じることができました。宗教や民族を意識することなく、みんな楽しく話している姿を見て心の底から嬉しくなりました。

JRCの発表・交流を通して、日本の文化を現地校の生徒に伝えることができ、文化を伝えることはとても大切だと実際に交流して思いました。

この6日間を通して私が思ったことは2つあります。1つ目は、たとえ言語が違ってもジェスチャーや知っている英単語で会話ができ、そのコミュニケーションのなかでお互いの情報を共有できることです。2つ目はどんなことにも諦めないということです。この研修は辛いことや苦しいことがあったけれど、それを乗り越えることで大きなことが学べました。

最後に、異文化を知ることによって、さらに他の国の文化についても興味や関心を持つことができました。この研修で学んだことを家族や学校の生徒・先生に伝えて行きたいと思います。



マレーシア研修での学び

茨城高等学校 星野 世那

私がマレーシア派遣事業の存在を知ったのは高校1年生の時だった。先輩たちが去年研修に参加している姿を見て、来年は私が参加するという強い思いのもと、JRC 活動に積極的に勤しんできた。この研修へ参加することが決まってから、この研修で「悔いの残らないように積極的に行動をする」と自分の中で目標を決めマレーシアへ旅立った。私がマレーシア研修で印象に残っていることは2つある。

1つ目は、赤新月社事務局長ダニエルさんの言葉だ。「私たちは将来のリーダーではない今日からリーダーだ」私はこの言葉にとっても衝撃を受けた。私はリーダーとしての自覚、今後リーダーとして成長するために何が大切かまだ明確になっていなかったからだ。この言葉を聞いた時、今後リーダーとしてどう行動していくべきか考えるきっかけになった。この言葉を胸にリーダーとして多様性のある行動を心がけたい。

2つ目は、現地の加盟校への訪問だ。民族衣装でのパワフルなパフォーマンスがとても印象的だった。交流会では日本の歌やダンス、折り紙など日本の文化を現地のメンバーと共有し楽しい時間となった。また、ワークショップでは現地のメンバー全員がとてもフレンドリーで私の拙い英語でも理解してくれ、沢山のコミュニケーションを取れたことは今後の自信に繋がった。音楽、食事、民族衣装、伝統文化など、異なる文化圏の言語、習慣、価値観を学び、民族の垣根を越えた多様な文化が共存しているのを肌で感じる事ができた。



今回この派遣を通して多くの学びがあった。多様な文化や価値観に触れる事でグローバルな視点を養うことができ、今後国際的なボランティア活動をしていく為の自覚を深める事ができた。この派遣事業で学んだマレーシアの取り組みをJRC 部の部員たちと共有をし、茨城県内の仲間たちにも広げていく活動を行う事が私の役割だと思っている。また、一緒に参加したメンバーから大きな刺激を受け、普段の自分からは想像できないほど積極的に行動する事ができた。この研修を通じて、自分自身大きく成長する事ができたと実感している。

最後にこの事業に関わってくださった、県支部の方、指導者の先生方、すべての方々から感謝を申し上げます。このような貴重な経験をさせてくださり本当にありがとうございました。一緒に参加した最高のメンバーに出会えたこと、チームとして一緒に頑張れたことは一生の宝物となりました。

みんなありがとう！ TerimaKasih!

感想文

成長と気づきのマレーシア派遣

茨城高等学校 2年 山田隆太郎

この度、令和7年度日本赤十字社北関東三県支部青少年赤十字国際交流マレーシア派遣事業に参加させていただきました。派遣を終えた今、振り返ると「またマレーシアに行きたい」と心から思えるほど、多くの温かさや学びに触れられた時間だったと感じます。現地で出会った人々の笑顔や優しさに触れるたびに、不安よりも安心が大きくなり、自分の心が自然と前向きになっていくのを実感しました。

派遣前は、リーダーとして「みんなを導かなければ」「期待に応えなければ」という思いに縛られ、不安や重圧ばかりが大きくなっていました。しかし実際に活動を進める中で、リーダーとは単に方向性を示す人ではないのだと気づきました。辞書には「組織やチームを導く人」と書かれていますが、それだけでは説明できないリーダー像があると思います。時には支えられ、時には支える。その繰り返しの中で共に成長していく存在こそリーダーなのだと感じました。「良いリーダーは良いサポートシップから生まれる」という言葉の意味を、今回の派遣を通して体で理解できたように思います。仲間がいてくれたからこそ、不安な私でも最後までリーダーとしての役割を果たすことができました。

もう一つ大きな学びは、JRC 活動そのものへの関心が一層深まったことです。現地の加盟校を訪



問した際、マレーシアの生徒たちが熱心に活動を紹介してくれた姿や、日本について質問してくれたことが強く印象に残っています。小さな対話を通じて互いの文化を理解し合えることは、国際交流の原点だと感じました。また、IFRC や現地の赤新月社で学んだ活動の広がりや、私が想像していた以上に大きく、青少年赤十字の持つ可能性を改めて実感しました。これまで以上に、自分自身も JRC の活動を多くの人に伝え、広めていきたいという思いが強くなりました。

今回の派遣で得た「リーダーとしての気づき」と「JRC 活動への理解と関心」は、私のこれからの人生において確かな指針になると思います。今後は、この経験を日常の中で活かしながら、一人でも多くの人に JRC の魅力を伝えていきたいです。そして、マレーシアで出会った人々の温かさや学びを忘れず、また新たな国際交流の機会に挑戦したいと考えています。



追い風に乗って

清真学園高等学校 2年 吉成侑希子

体育祭と同じ日に選考面接が重なってしまったため、私は体育祭を欠席し、面接を受けました。その選択には、後悔は一つもありません。この研修を知ってから、マレーシア研修に参加することを目標に JRC 活動に励んでできました。結局は活動そのものが楽しく、参加していたのですが。

乱気流に吞まれながらたどり着いたマレーシアは、まるで別世界のようでした。生き急いでいた日本とは違い、マレーシアで過ごした5日間はまるで夢の景色のように、ただひたすらに美しく時間が過ぎていきました。

普段から特に緊張することも無く過ごしていた自分にとって、マレーシアも例外ではなく、あまり緊張しなかったからこそ、結果として5日間の思い出は鮮明に記憶に刻まれています。

マレーシア研修の中で特に刺激的だった出来事は、現地での食体験です。国が違えば食文化も違って当たり前です。辛いものが大好きで大得意な私ですが、口にすると、マレーシア独特のお料理の味がしました。記憶と味覚に深く刻まれた経験になりました。

マレーシア研修に参加する前に私が不安だったのは、自分の英語力でした。自分の英語力を自慢できるほどの自信があったわけではありません。しかし、5日間も現地に身を置けば、人は順応します。今振り返れば、現地のスーパーでお買い物をし



た時も、当たり前英語で記載されている成分表示を読んでいました。会話もリアクションも、当たり前英語を話していたのです。人間の適応能力には驚かされました。そして何より、それは「挑戦すれば、自分には何でもできる」という、人生を今までよりも前のめりに生きる上での大切な教訓となりました。

また、マレーシア研修に参加する1週間前に、学校の図書館で一冊の本を借りました。マレー語の教科書です。先ほど書いたように、私は英語力に自信がなかったのでマレー語を少しでも勉強しました。単語、文法、スピーキング。1日1時間はマレー語を必ず勉強すると決め、学校での授業の休み時間に友達に覚えてたてほやほやのマレー語で喋りかけていました。これは、現地の生徒と会話をした時の咄嗟の表現に少しでも役に立ちました。来年度参加する方は、リアクションのフレーズだけでも覚えて行くとマレーシア研修がより一層楽しいと思います。

このマレーシア研修は、間違いなく私にとってかけがえのない経験でした。高校生のうちに、実際に現地を訪れ、特別な施設に訪問して身をもって経験する。これは本当に良い経験でした。今回の研修で得た学びや知識を、これからの JRC 活動や人生に活かしていきたいと思っています。





マレーシアにおける派遣事業を通して

常総学院高等学校 2年 村野 杏

私は、今回のマレーシアにおける青少年赤十字国際交流派遣事業を通して、多くの貴重な体験をさせていただき、とても成長したと思います。

今回、マレーシアの派遣事業に参加させていただいたきっかけとなったのは、顧問の先生が勧めてくださったことでした。私は、赤十字と国際的な支援に興味があり、世界で活躍する管理栄養士になるという夢を持っていたので、先生から派遣のお話を伺ったときは、実感はありませんでしたが、とても嬉しかったです。海外での研修ということで、少し不安はありましたが、派遣に行きたいという思いだけは強く持ち、面接に挑みました。このマレーシアの派遣事業が将来、自分の糧になると信じていたので、先生から合格したというお知らせを頂いた時も、本当に嬉しかったです。

今回のマレーシア派遣事業は、私にとって、学びとして得られたことだけでなく、自分自身が成長できた機会でもあったと思います。私は元々、人に対してあまり意見を積極的に言えるタイプではありませんでした。しかし、今回、マレーシアの学校を訪問するために英語での発表とダンスをたくさん練習しました。事前にオンラインで集まって会議をし、もっと現地の学校の生徒に分かりやすく

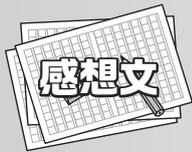
伝えるためにはどうしたらいいかなどを話し合いました。ついに迎えた当日は、大きなハプニングはなく、他県のみならず現地の学校の生徒が温かい目で見守ってくれていた

ので、茨城県のメンバーと一緒にダンスを踊り終わったあとの達成感がとても嬉しかったです。

また、マレーシアで訪れた場所の中で、強く心に残っているのは、寄付だけで設立された病院です。そこは、とても地域に密着していて、話を聞いてほしいという時にも、予約無しで入ることができるそうです。低収入の人や難民の方、家がない人々も受け入れているということを知って驚きました。そういった病院が世界中に広まれば、貧困や飢餓に苦しむ人々などがもっと減少するのではないかと思います。さらにそこでは、27年間も透析を受けている方のお話を聞きました。薬を飲んででも血圧が下がらず、週に三回ほどその病院に通っているとおっしゃっていました。もし自分だったら、継続して病院に通うことは難しいと思います。私とその方の命は平等です。しかし、一生懸命生きようとする思いはその方のほうが強いと思います。私はお話を聞いて、もっと尊い命を大切に毎日生きようと改めて実感しました。

最後に、私はこのマレーシアの派遣事業に携わってくださったすべての皆さんに感謝しています。私は、このマレーシア派遣の準備期間を含め、少し自分に自信が持てるようになりました。私を支えてくださり、本当にありがとうございました。





派遣を通して知った新たな世界

栃木県立栃木女子高等学校 2年 田辺 紬

人生 16 年目、16 回目の夏での初海外。初めての出来事で楽しみな気持ちもあったが、右も左もわからない状態で不安だった。

迎えた事前研修会。栃木県メンバーで集まり、茨城県メンバーと群馬県メンバーも加わり、少しずつ仲を深めることができた。前泊のときは、事前研修会から日が空いたのを感じないほど、たくさんメンバーや先生方と楽しく話した。マレーシアに着いても、協力しあって、活動や交流を行うことができた。

5泊6日のうち3日目から本格的に研修が始まった。最初は、赤新月社。災害や事故を想定して救出活動を行っている様子を写真でみたり、2019年のコロナ禍のときに、日本が寄付した救急車を内部まで見学したり、1900年代初期に起きた海難事故で離れ離れになった家族をつなぐための2万枚近いカードを見たりした。カードには、個人情報を書いてあり、そのカードを頼りに多くの家族が再会できたことを知った。また、現地の方の話によると、救急車が患者さんの元に到着するのに、病院と連携するため、約30分かかることがわかった。日本では、全国平均で約8分であるため、違いを感じた瞬間だった。

次は、IFRCを訪問した。いくつかの組織に分かれ、自然災害や移民問題、保健・福祉分野など人々に対する支援活動を世界規模で行っている。また、従事者も多国籍であったが、言語が異なっても、コミュニケーションを取ろうとする気持ちがあれば、問題解決に近づいていくことを知った。

4日目は赤新月施設訪問ということで、病院に行った。診察室を見学したり、透析治療を行う患者さんのお話を聞いたり、あまり経験することの

できない場合に訪問できて良かった。その後、学校訪問で共学の中等教育学校に行った。そこで、日本の学

校や日本の文化、JRC活動について事前に準備し、分担したものをそれぞれの県で発表した。見学の際には、現地の学生が企画してくださったレクリエーションを体験したり、コミュニケーションを取ったりと楽しく活動することができた。

活動最終日となる5日目は、前日とは違う共学の中等教育学校を訪問した。私たちは、前日と同じく発表を行い、その後、現地の学生とレクリエーションを行ったり、私は通訳の方も交えてインタビューも行った。とても有意義な時間をそれぞれの日で過ごすことができた。

冒頭でも述べたように、最初は、5泊6日を異国の地で生活することが不安だった。だが、日本人メンバーや先生方、スタッフの皆さんの優しさや、現地の訪問先の方や学生が温かく迎え入れてくださったことが嬉しかった。また、現地の学生のパフォーマンスと日本のメンバーで準備したパフォーマンスを一緒に行ったことで心の距離を縮めることができ、とても嬉しかった。国は違っても、お互いに繋がろうとする気持ちがあれば上手くいくことを学んだ。この経験を自分だけのものにせず、多くの人に伝えたい。



感想文

マレーシアでの貴重な体験

栃木県立真岡女子高等学校 2年 田中 美結

私の将来の夢はエンジニアになることです。JRC 部とは直接関係のない職業だと思えますが、高校生活では夢に関係なくさまざまなことに挑戦してみたいという気持ちがありました。JRC 部に入部したのも、そうした思いからです。今回のマレーシア派遣も、視野を広げる良い機会になると考え応募を決めました。先生から団員に選ばれたと報告を受けたときはとても嬉しかった反面、初めての海外そして家族と 6 日間離れて過ごすことに対して不安や心配もありました。しかし、実際に派遣の日が近づくにつれ、不安よりもワクワクする気持ちの方が強くなっていきました。事前研修で他のメンバーと顔を合わせ、話をしていく中で、皆さんがとても優しく、「この人たちとなら楽しく過ごせそうだ」と感じられたからです。

マレーシアで出会った現地の方々もとても明るく、親切な方ばかりでした。私は英語が得意ではありませんが、以前長く英会話に通っていた経験があり言葉が通じないときの伝え方には自信があり

ました。実際に現地の人と話してみると、単語が分からなかったり聞き取れなかったりする場面も多くありましたが、そんなときに

は現地の方がゆっくり話してくれたり、ジェスチャーを使ってくれたりしてとても助かりました。また、日本語を勉強している方とも出会い、とても驚き嬉しく感じました。

次に食事についてです。滞在中は多くの場所で食事をいただき、どの料理も 1 口は必ず味わわせてもらいました。しかし、正直に言うと私の口にはあまり合わないものが多くありました(もちろん、美味しいと感じた料理もありました)。また、マレーシアはイスラム教徒が人口の 6 割を占めていると言われていています。イスラム教では左手を不浄とするため、食事の際に左手を使うことはタブーとされています。私が何気なく左手を使ってしまった時には、周囲から冷たい視線を向けられたこともあり、文化の違いを強く感じました。

最後に、マレーシア派遣は私にとって大変貴重な経験となりました。数々のハプニングもありましたが、その中で支えてくださった現地の方々、団員の仲間、赤十字の皆さん、先生、そして両親に対し感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

Terima kasih





マレーシアでの経験

栃木県立宇都宮高等学校 2年 宮本 歩夢

自分にとって初めての国際交流でこのマレーシア派遣に参加できて本当に良かったです。この5泊6日のJRCとしての国際交流研修でしか得られなかった学びや体験があったと強く思っています。

マレーシアに着いてまず日本とは違った植生や街並み、街にあふれる中国語や英語、マレー語などの言語のバリエーションにとっても驚きました。食事ではタロイモなど東南アジアならではの料理や中華やインド料理などを楽しむことで、マレーシアの文化を全身で体験することができました。

マレーシア新月社の訪問では難民の方のプロフィールカードを見せてもらったときに新月社が今までに助けた人の数であるそのカードの量に圧倒されました。日本とマレーシアで行う活動は多少異なれど、困っている人を助けるという基本の理念が同じである赤十字・赤新月の存在の偉大さを実感しました。

加盟校との交流ではマレーシアの文化を学ぶことができました。現地のおやつを食べたり、伝統的な衣装を着させてもらったり、音楽を体験したり、一つ一つの体験により、より深くマレーシアの文化を学ぶことができましたと思います。また、交流の初



めにマレーシアの伝統的な踊りや武術を見て強く感動したことを覚えています。日本の発表では、現地の生徒たちと一緒に踊ったり、歌ったり、かぶとを折ったりと用意してきたもので



しっかりと交流を楽しむことができ良かったです。実際の交流の場面では、思っていることが上手く伝わらなかったり、上手く聞き取れなかったりすることがたくさんありました。しかし、マレーシアの方々がとても優しく明るく接してくれたおかげで良い交流ができたなと思います。言葉が上手く伝わらなくても会話しようとするれば何とかできると感じました。

多くの学びがありましたが、やはりこのマレーシア研修での一番の学びは異文化共生です。日本に暮らして異文化に触れ合う機会はとても少なく、マレーシアに行くまで異文化共生についてぼんやりとしたイメージしかありませんでした。しかし、マレーシアでの食事や言語、宗教のあり方を見て、自然と互いを理解出来ているからこそその多文化共生であるのだと身をもって感じました。グローバル化が進むこの社会の中で改めて一人一人が「互いの文化の違いを知る」ということの重要性を知りました。

今回のマレーシア派遣で得た学びをこれからのJRC活動の中で共有したり、伝えたりして行く中でさらに大きな学びとなるようにし、将来へと活かしていきたいと思っています。

派遣メンバーの皆さんや指導員の先生方、このような貴重な機会をくださり、そして支えてくださり本当にありがとうございました。



マレーシア研修で私が得たもの

栃木県立小山西高等学校 2年 深津 もこ

私は今年度のマレーシア派遣に参加しました。今までに体験したことのない文化の違いや、歴史的背景、伝統を知ることができました。

まず、マレーシアでの1日目の活動では、赤新月社訪問とIFRCに訪問させていただきました。ここでは、私が学んできた青少年赤十字の歴史や赤十字メンバーとしてのあり方をもう一度学ぶことができました。また、マレーシアの赤新月社がこれまで行ってきた活動を知ることができ、私たち高校生の活動とは異なる規模で、歴史的背景から日本とは異なる活動を初めて知ることができました。

そこで私は、初めて英語を話しましたが、とても温かく目を見て話を聞いてくださったり、ゆっくりとわかりやすい英語で答えてくださったりしていただきました。ここでの経験は私の中でかなり大きなものになったと思います。

マレーシアでの2日目は、病院訪問と赤新月社加盟校訪問でした。まず、午前中の訪問では、今まで医療の話はリーダーシップ・トレーニング・センターや、スタディー・センターで聞いてきましたが、より多くの患者さんに関わってきた方の話にはまた違う重みのある内容でした。安く医療機関を受診できることがどれだけ大切で、ありがたいことなのかを実感しました。透析のお話の中で、実際に患者さんが感じた後悔を話してくださいました。私が今健康でいられるのは周りの方々の配慮も関係していると知るきっかけになりました。

加盟校訪問では、今までに経験したことのない歓迎のムードでとても優しく迎え入れていただきました。日本の文化を既によく知っていたようで、私たちにとっても興

味を持って接してくれていました。私は同世代との異文化交流は初めてで、訪問する前は自分の発表のことで頭がいっぱいでしたが、マレーシアの伝統的な踊りや文化を紹介してもらい、私たちが楽しく日本を紹介することが今1番求められていることだと理解することができました。1度目の本番では、想像以上の盛り上がりで、私は心の底から今回の研修のテーマである異文化交流を楽しむことができました。

マレーシア最終日は2つ目の学校訪問、そしてセントラルマーケットで買い物をしました。2校目ということもあって少し心のゆとりがあったのですが、ここからだんだん体調を崩すメンバーが増えて緊張感が強まりました。しかし、メンバー1人1人が責任感を持って挑んだこの研修は私たちが自分たちの声で無事に発表を終えることができました。ここではたくさんの料理を振舞っていただき、さらにマレーシアの伝統を知ることができました。セントラルマーケットでは、栃木メンバーでお揃いのキーホルダーを作ることができて、最高の思い出となりました。

このような経験ができたのは家族や先生、赤十字職員の方々の協力があったからこそです。感謝を忘れずにこの経験をたくさんの人に伝えていきたいです。





マレーシアでの経験と学び

栃木県立小山城南高等学校 2年 佐野琥太郎

私は先日のマレーシア研修に参加し、新しい体験や学びを得ました。特に、多文化共生や異文化理解、そして国際交流が深く印象に残りました。

はじめに、マレーシアでの1日目は赤新月社とIFRCに訪問させて頂きました。赤新月社では政府と密接に関係しているということに驚きました。また、災害救援部門を筆頭に健康部門や心理サポート部門などの様々な部門に分かれて活動していることがわかりました。他にも赤新月社には救急車が15台あり、そのうちの2台は日本から寄付してもらったものだという話を聞いてどこか繋がりを感じ嬉しく思いました。また日本は戦争や紛争がないのであまり実感が湧きませんでした。紛争で負傷した兵士や一般市民を手当する写真を見て衝撃を受けるとともに人間同士が傷ついている現状は赤十字の掲げる"人間を救うのは人間だ"という言葉と真逆でありとても悲しくなりました。IFRCでは設立の起源や赤十字との関係などについて学びました。起源は日本含めた5カ国が立ち上げ100年以上経過し191カ国が加盟して今に至ります。そして、ICRCという戦争に関することを担当する機関からIFRCへ、そして国際赤十字と様々な機関が繋がって世界で活躍する機関であることを知り、誇りが持てました。

マレーシア2日目の活動は現地赤十字施設と現地の赤十字加盟校の訪問をさせて頂きました。

赤十字施設では実際に透析治療を受ける患者さんに会い、話を聞くことができました。マレーシアでは5人に1人は糖尿病を患っており、健康診断が定着していないことや安く、手軽に掛かれる医療機関が少ないことが原因の1つだとお話を伺いました。私は先日まで常にお菓子が手の届くところにあり、ジュースを常飲する生活でしたが両親に糖尿病になるぞと言われ飲み物をお茶に変えました。そしてこの研修でこのままの生活で過ごした自分の未来を見ているようで人一倍糖尿病に対する恐怖心を持ちました。学校訪問では、初めての英語を使ったコミュニケーションで、人より英語が苦手な私はかなり苦勞しました。しかし、全身を使ってなんとか伝えようとして相手が分かってくれたとき、とても嬉しく思い人の繋がりは言葉以上に思いが大切だと感じました。また、マレーシアの伝統文化や工芸で私たちを楽しませてくれました。民族衣装を実際に着せてもらったのが印象に残っています。研修5日目ということもあり、疲労が出てきたのか体調を崩すメンバーが増えてきてイレギュラーな対応を求められました。しかし、個々が強い責任感を持ち最後までやり遂げることができました。

最後に、本研修は大勢の方の協力あってこそ実現した貴重な機会ということをお忘れず、経験したことをみんなに伝えていこうと思います。





貴重な経験を通して

群馬県立高崎北高等学校 2年 丹羽 稀咲

部活で顧問から紹介された今回の派遣事業。「参加したい！」そう強く思いました。しかし、いざ選考会に向けて準備を始めると自分がいかに未熟なのか思い知らされました。考えや意欲はあるのに、作文は上手くまとめられず、面接練習では長所短所すらはっきり伝えられない…人としてまだまだであると感じ、不安でいっぱいのまま選考会に挑んだことを覚えています。とにかく挑戦してみようと思っただけの結果、団員となれたことに驚きと嬉しさでいっぱいでした。研修会に参加し、メンバーと顔を合わせてからは不安と高揚感が共存していました。行動力とコミュニケーション力のあるメンバーたちは輝いて見え、これからこの素敵なメンバーに囲まれて活動していくことを想像するとワクワクすると同時に自分もしっかりしないといけないと思ったからです。

マレーシア派遣が始まってからは不安も忘れるほど必死でした。海外に行くことも、訪れる場所も、接する人々も、食べるものもすべてがはじめて。大変なこともありましたが、それ以上に楽しい思い出を作ることができました。中でも一番感動した点は現地の人々の温かさです。様々な場所を訪問しましたが、出会った人たちは皆さん笑顔で歓迎してくれました。交流の際には、私たちが楽しめるような場を作り、積極的なコミュニケーションや写真撮影などで盛り上げてくれました。10歳



くらいの子が私に笑顔でお菓子を差し出してくれたことも印象に残っています。また、人々の温かさはインタビューの際にも表れていました。ぎこちない私の英語を一生懸命聞き取ろうとし答えるときにもゆっくりと話してくれたり、録音が上手く出来ず何度もお願いしてしまった時も「気にしないで」と声をかけてくれたりと、とても助けられました。マレーシア訪問の前から、多民族の共存が成り立っているのは一人一人の配慮や親切心が大きく影響しているのではと予想していましたが、実際に体験してみるとそれらは想像以上でした。

はじめは大きな不安を抱えていた今回の派遣事業。様々な経験を通して、その不安をたくさんの知識と自信に変えることができました。今後は貴重な経験を無駄にしないよう仲間に周知するとともに、これからの JRC 活動に活かしていきたいです。

最後に、共に参加したメンバーや先生方、支部職員の方、看護師さん、現地の方々へ感謝申し上げます。皆さまのおかげで派遣事業を無事に終えることができました。本当にありがとうございました。



みんなの笑顔に出会えたマレーシア交流派遣

群馬県立渋川女子高等学校 小林 咲穂

マレーシア派遣に参加できると知った時、大変驚き嬉しくて涙が出ました。楽しみと不安な気持ちで、緊張しながら事前研修会に向かいました。そこでは、参加メンバーそれぞれが互いの事を思いやり、「全員で協力し楽しんでこの派遣を成功させたい」と、一人一人の強い意志を感じました。マレーシア出発の前日、ホテルでドキドキしながら、みんなで発表の練習をし、これで乗り切れる！と信じて飛行機に乗る事ができました。

現地の施設訪問先では皆私たちが温かい笑顔で迎えてくれました。訪問した二校の学校どちらも、私たちのダンスや歌の発表に、すぐにリズムにのり笑顔でリアクションを返してくれたので、ほっと安心し緊張も和らぎました。そして、マレーシアの伝統的な音楽の演奏と踊りを披露してくれました。また、私たちが発表の時に着た浴衣を訪問校の学生に着てもらい、私たちはマレーシアの伝統的な衣装を羽織らせてもらいました。同世代の学生同士、お互いの文化に触れる事ができ、有意義でとても楽しい時間を過ごせました。言語や文化が違うからこそ、お互いをよく知りたいという気持ちで交流できたと思います。発表が思うようにできなかった時もありましたが、メンバーや先生方の温かい声かけに何度も助けられました。

マレーシア滞在中の食事では様々な料理をいただきました。香辛料が多く使われていて、想像した



味と違い驚いたりしました。キレイな色の料理も多く、目でも楽しめました。香水のような香りのブルーのお米には特に驚きました。

私は看護師を目指していて、現地の病院訪問は



特に楽しみでした。自ら医師に質問をし、普段と違い積極的に行動できました。同行した看護師の今松さんはみんなの体調を気かけ、優しく声をかけてくださり心強かったです。最後の健康チェックのコメントに、「良い看護師になれますよ」と書いてあり、心が熱くなり、看護師になりたいと一層強く思いました。そして赤十字病院に就職し、災害時のボランティアや国際的な活動にも参加したいです。

帰国後、自由研究の課題を進める為、現地で交流した学生に Instagram で質問をすると丁寧に答えてくれ、「他にも質問があればいつでも聞いてね！」とメッセージをくれました。現地で交流した学生の優しさに再度触れる事ができ感動しました。これからも Instagram での交流を続け、互いの国についての理解をさらに深めていきたいです。

この派遣に参加させていただき、赤十字社の皆様や先生方、参加メンバーのみんな、現地の方々など、たくさんの出会いがありました。出会った人みんなが優しく温かく励ましてくれたお陰で最後まで楽しく頑張る事ができました。また、この派遣に応募するにあたり、学校の先生や家族などの身近な人たちに背中を押してもらいました。この派遣を通して関わった方々に心より感謝しています。本当にありがとうございました！



多文化が織りなす温かさ

太田市立太田高等学校 2年 羽中田桜花

マレーシア派遣事業への参加は、私の人生において忘れられない、深く心に刻まれる経験となりました。出発前は期待と不安が入り混じっていましたが、この派遣を通して、言葉や文化の壁を越えた心の温かさを知ることができました。

特に心に残っているのは、現地校の生徒たちとの交流です。伝統的な踊りや演奏で温かく歓迎してくれたときは、胸が熱くなりました。私たちのために、たくさんの時間と想いを込めて準備してくれたのだと感じ、私たちも日本の文化を精一杯伝えたいと思いました。

多民族、多宗教の人々が共に生活するマレーシアの光景は、事前に学んだ知識とは比べ物にならないほど大きな衝撃でした。異なる文化や伝統を持つ人々が互いを尊重し、笑顔で助け合ったり交流をしている姿は、私の中の多文化に対する価値観を大きく変えるきっかけとなりました。最初は言葉の壁に戸惑いましたが、彼らは私のつたない英語にも真剣に耳を傾け、身振り手振りを交えて、そして笑顔で一生懸命に理解しようとしてくれました。その熱意と優しさに触れたとき、私は言葉だけがコミュニケーションではないのだと心から実感しました。私たちが日本の文化を紹介した際には、彼らは目を輝かせながら熱心に耳を傾けてくれました。ダンスや歌、折り紙などを通して一緒に体を動かす交流の場面では、満面の笑みで私たちも知ってるよ、もっと知りたい！などと積極的に



話しかけてくれて、文化を知ることだけではなく伝えることの喜びと素晴らしさを感じました。

お別れの時には、沢山の仲間が「また会おうね」「マレーシアに来てくれてありがとう」「日本に行ったときには案内してね」などと声をかけ

てくれました。バスが発車するとき、現地の人たちが手を振り、ハートポーズなどをしてくれた姿に、思わず涙が出そうになりました。短い期間ではありましたが、私たちが確かに心を通わせ、深い友情を育めた証だと感じました。国境を越え、文化を超えて築かれたこの絆こそが、今回の派遣で得た何物にも代えがたい最大の贈り物です。

この派遣事業を通して、私は多様性という言葉の本当の意味を理解できた気がします。それは、ただ異なるものを受け入れるだけでなく、その違いを認め、尊重し、共に生きる喜びを見出すことなのだ。マレーシアで感じた温かい人々の心と異文化を尊重する姿を今度は私が沢山の人に伝えていきたいです。そして将来は色々な背景を持った患者さん一人ひとりに寄り添えるような素敵な薬剤師になりたいです。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった関係者の皆様、温かく迎えてくださったマレーシアの方々、そして、かけがえのない時間を共に過ごし支えてくれた仲間たちに、心からの感謝を伝えたいと思います。「Terima kasih」





異文化交流で得たもの

明照学園樹徳高等学校 太田 いと

この研修のメインである現地校訪問は、大きな期待と不安の中で始まりました。初めての海外研修。さらに異なる文化や言語の中で交流するという経験は、私にとって未知の世界でした。前日までメンバーと共に何度も発表練習を重ねたものの、「本番でうまく話せるだろうか」「相手に理解してもらえるだろうか」という不安は消えませんでした。

しかし、現地校へ到着した瞬間、その不安は少しずつ溶けていきました。私たちが到着すると共に、伝統的なパフォーマンスと共に迎えてくれたのです。初めて会う日本人であろう私たちに、驚くほどの歓迎をしてくれたことで私はとても安心しました。

英語力に自信がないことから私は、それでも不安は残りました。しかし、いざ発表が始まると、予想を遥かに超える反応が返ってきました。笑顔で手を振ってくれる人、身を乗り出して楽しんでくれる人、大きな拍手や歓声を送ってくれる人。そんな姿を目にした瞬間、緊張は喜びに変わり、最後まで楽しく発表をやりきることができました。そして私は大きな達成感を感じました。

もし私が逆の立場で、日本に来たマレーシアの方々をおもてなしする場面だったら、私が受けた大きな反応で迎えることができたでしょうか。

きつと難しかったと思います。私が今回感じた「大きな反応」は、マレーシアの方々の人柄や文化からくる温かさと優しさの表れだと強く感じました。

もちろん、日本でも温かさや優しさを感じる場面は多くあります。しかし、言語や文化の違いという壁がある中で、それを全力で伝え合おうとする姿勢に触れられたことは、私にとって特別な経験でした。それは「違いがあっても、人はこんなにも心を通わせられる」という実感であり、異文化交流の本当の魅力を教えてくれました。

今回の研修を通じて、私は大きな自信を持ちました。言葉が通じなくても、表情や態度、心からの気持ちは必ず相手に届くこと。そして、自分から一歩踏み出すことで、相手の温かさや優しさに出会えること。その両方を、私は身をもって学びました。

マレーシアで過ごした日々は、私にとって有意義な時間となりました。本当に参加してよかったです。この経験を通して得た自信と学びを、これからの学校生活や将来の活動にも生かしていきたいと思います。研修に関わってくださったすべての方々に心から感謝します。本当にありがとうございました。





経験という先生

群馬大学共同教育学部附属中学校 関口奈々美

私はこのマレーシア派遣を通して、自分の役割を理解し、自己成長を遂げるとともに、現地の文化に触れることができました。

マレーシアの赤新月社の活動では、日本と同様に「人道・公平・中立・独立・奉仕・単一・世界性」の7つの基本原則に基づいたさまざまな取り組みが行われていることを知りました。たとえば、地域イベントを主催し健康診断や献血を促したり、他国での災害に派遣されたり、心理的支援を行ったりしています。さらに、日本の赤十字活動には見られない活動もあり、大変印象に残りました。それは、マレーシアに避難してきた約25万人もの難民の方々が安心して暮らせるよう、移住支援を行っているということです。マレーシア赤新月社の施設内には、たくさんの“引き出し”がある部屋がありました。部屋の壁のほとんどが引き出しで、高さは約2メートル。中には葉書ほどの大きさの紙がぎっしりと保管されていました。

その一枚一枚に、難民の氏名・性別・生年月日などが丁寧に手書きされており、当時の方々のご苦労がひしひしと伝わってきました。

学校訪問では、民族ごとの異なる踊りで盛大に歓迎してくれました。音楽の音色やリズムも民族によって異なり、とても興味深かったです。学生との交流会では、マレーシアの伝統的なお菓子「Kuih (クエ)」を一緒に作り、実際に自分たちで作ったものを食べることができました。もちもちとした食感で、和菓子のような見た目でした。また、書道で私たちの名前を書いてくれたり、竹製の伝統打楽器「アングルン」を演奏したりと、現地の



学校ならではの楽しい体験ができました。

私たちの交流発表では、浴衣姿

を見た学生たちが「It suits you!」「Very cute!」と歓声を上げてくれました。順調に発表が進む中、機材トラブルで音声が流れなくなるというアクシデントが発生しましたが、臨機応変に「One more time, please.」と伝え、その場をつなぎながら無事に発表を終えることができました。発表後には大きな拍手をいただき、大きな達成感を感じることができました。学生たちの感想を通して、日本の文化が海外の人々にとって新鮮で魅力的なものだと、あらためて実感しました。



最後に、マレーシアの方々や派遣メンバーの優しさに包まれながら、無事にこの派遣を終えることができました。この経験は、私にとって忘れられない大切な思い出です。

今後も、今回の派遣で得た学びを将来に活かし、さらに成長した自分で、多くの人にこの経験を伝えていきたいと思えます。

このような素晴らしい機会を与えてくださった赤十字の皆さま、研修期間中にサポートして下さった指導者・事務局の方々、そして仲良くしてくれた派遣メンバーに、感謝の気持ちで胸がいっぱいです!!

『Terima kasih ! (ありがとう!)』





かけがえのない出会いと学び

茨城高等学校 教諭 井上 奈穂

マレーシアは私にとって初めて訪れる国ということもあり、期待と同時に不安も抱えての出発となりました。イスラム教徒が多数を占める国であることから、事前研修では、生活習慣や食文化、色にも配慮が必要であることを知り、生徒たちと共に驚いたことを覚えています。また、現地の方々が日本に対してどのような印象を持っているのか、どのようなことを伝えれば喜んでいただけるのかを考えたとき、まずは私たち自身が日本について深く理解することの大切さに気づかされました。

現地ガイドのピーターさんの「ストレスといえ



ば交通渋滞くらい」「季節はひとつ、夏だけ」「多民族だからこそ、互いが一番大切」といった言葉には、マレーシアという国の温かさや価値

観が詰まっていたように思います。実際に滞在してみて、マレーシアでは多様性を自然に受け入れ、互いを尊重する姿勢が生活の中に当たり前のように根付いていることを実感しました。自分の目で見て、肌で感じる事ができたのは、本当に貴重な経験でした。

赤新月社や IFRC、現地病院でのお話、さらには

現地校の生徒たちとの交流など、観光では得られないような深い学びや気づきが数多くありました。



そして、15名の生徒たちとの出会いもかけがえのないものとなりました。初対面とは思えないほど明るく積極的に活動し、高いコミュニケーショ

ン力を発揮する姿に驚かされるとともに、各県の代表としての自覚や意識の高さに深く感心しました。限られた準備期間の中で、それぞれの県の発表がしっかりと仕上がっていたことも本当に素晴らしかったです。

この経験を通して、JRC 部の顧問として、生徒たちがより主体的に活動できるような機会を今後さらに増やしていきたいという新たな思いが芽生えました。

「体験に勝る学びはない」という言葉のとおり、今回の研修では多くの場面で、生徒たちの大きな成長を感じました。自ら考え、意見を出し合い、行動し、成功をつかんだときのあの自信に満ちた表情は、今も強く心に残っています。その姿を見て、私自身も多くのことに気づき、学び、成長させてもらいました。

そして、マレー語を学び、再びマレーシアを訪れたいという夢ができました。自分の言葉で直接相手の方と会話できた時の感動は忘れられません。また、マレーシアの食事は美味しいです。マレーシア料理はもちろん、インド料理や中華料理、日本料理も食べることができます。特に、カレーのスパイスとナシレマは最高でした。いつの日かマレーシアの地に立てることを楽しみに、日々、勉強に励みたいと思います！

今回の研修は、青少年赤十字に携わる指導者として、そして教員としても、大変意義深いものでした。21名全員で成田空港に戻ってこられたときの、安堵感と達成感は、きっとこれからも忘れることはないと思います。

最後に、マレーシアでの貴重な経験と素晴らしい出会いを支えてくださったすべての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。





令和の佐野常民たちへ

栃木県立小山城南高校 教諭 高津戸雄飛

「きっとこの世界の共通言語は英語じゃなくて笑顔だと思う」これは高橋優さんの「福笑い」という曲の一節です。今回の研修で皆さんがいきいきと交流する姿を見てこの歌詞が思い出されました。他のフレーズも、研修を終えた皆さんに強く響く部分があると思います。気になった方はぜひ聞いてみてください。

初めての飛行機、初めての海外という人にとって今回の研修は大きな試練だらけだったと思います。たくさんの「初めて」への不安を乗り越えて参加申し込みをした皆さんの勇気に敬意を表したいです。事前研修会からすべての研修を終えるまで、皆さんがひとつひとつのできごとに心を動かし、目をキラキラさせている姿を目の当たりにしました。私自身もメンバーの熱意に触発されてか、いつも以上に積極的に研修に参加できたように思います。

1867年、佐野常民は佐賀藩から派遣されパリ万博への出展をします。現在とは比較にならないほど海外へ行くことが難しかった時代、見るもの聞くことのすべてが大きな衝撃だったのではないのでしょうか。佐野常民はその万博会場で発足したばかりの赤十字パビリオンを訪れました。赤十字と出会ったとき、きっと佐野常民は今回の皆さんのように心を動かし、目をキラキラさせていたと思います。160年の時を超えて佐野常民が感じた衝撃や感動を皆さんが追体験しているような、そんな感覚を研修の間ずっと感じていました。

海外派遣から赤十字を含むたくさんの技術や思

想を持ち帰った佐野常民は、日本の近代化に大きく貢献します。今回の研修で私たちは何を持ち帰ってこれたでしょうか。私がこの研修で感じたことは赤十字の輪の大きさ、そして人の力です。

日本から遠く離れた地にも多くの方が住んでいて、私たちとは全く違う信念や価値観を持って生活していました。そして広い世界の異国の地でも赤十字の考えに賛同し様々な活動している人たちがたくさんいました。赤十字の輪が世界中のいたるところに広がっている、赤十字組織の大きさに今更ながら感銘を受けました。加えて、私たちのJRC活動はどこかで世界とつながっていることを学びました。

マレーシアの生活は、日本に暮らす人から見れば「足りない」と思うこともあったかもしれませんが、ただ、マレーシアの人たちにはその「足りない」をカバーしようとする人の力がとても強くあったように感じました。私たちが何かしなくてはというこの考えは、「足りている」今の日本人に失われつつあるものではないかと思いました。帰国してからは、マレーシアで見た人の力や熱量を、日本で発揮できる場所はないかと探すようになりました。

この研修に参加したメンバーはきっと私以上に様々なものを持ち帰ってきたはず。この研修ののち、それぞれに何かが始まり、そしてそれぞれが何かを始めることでこの研修が続いていくことを期待しています。





コミュニケーションから生まれる学びと感動

太田市立毛里田中学校 教諭 西村 雄希

今回の派遣では、現地施設のスタッフや関係者の皆さまに温かく、盛大に迎えていただきました。訪れた二つの学校では到着した途端、素晴らしいパフォーマンスをしてくださいました。伝統的な踊りや演奏、演舞には大変感動しました。大歓迎してくださったことにより、我々は北関東代表ではなく、日本代表として参加しているのだということ強く実感いたしました。私も他の派遣団員も改めて身を引き締め、使命感をもって活動に取り組みました。

赤新月社や IFRC の方々、マレーシアの生徒、ガイドやホテルのスタッフ、さらには旅行者とのコミュニケーションすべてが有意義であり、多くの学びを得ることができました。公式訪問でのやり取りはもちろん、ホテルで出会ったブラジル人旅行者との何気ない会話まで、一つ一つのコミュニケーションをこれほどまでに楽しめたのは初めてでした。マレー語での挨拶や英語でのやりとりを通じて得られた感動や発見は、かけがえのない経験となりました。このような貴重な機会をいただけたことに、深く感謝申し上げます。

マレーシア滞在中、特に印象的であったのはマレーシアの生徒たちの学ぶ姿勢や表現力、そして積極性です。「ぜひ見てほしい、聞いてほしい、話したい、体験してほしい、インタビューさせてほしい。」など、躊躇することなく飛び込んできてくれました。その姿に大きな刺激を受け、感銘を受けました。私もできる限り全力で応えさせていただきました。その際、自国日本のことをより深く理解し、適切に伝えられるようにしなければと思われました。これは私の今後の課題です。

JRC 派遣団の生徒たちについても成長を感じる場面が多々ありました。本当に限られた準備期間でしたが、生徒同士でコミュニケーションを取りながら作り上げ、本番を迎えました。彼らは準備期間も滞在

中も、自ら気づき、考え、行動していました。マレーシアの病院等の施設で進んでインタビューをしたり、学校では現地の学生に自分から話しかけたりと、積極的にコミュニケーションを行う様子が見られました。通訳さんに頼らず、失敗を恐れず行動する様子は立派でした。研修中の生徒は体調不良を含め、思うようにいかないことや失敗は実際ありました。しかし、それらすべてが学びとなり、経験値となるので、無駄なことや無駄な時間は全くと生徒に伝えました。学生のうちにこのような体験ができることは大変意義深く、正直なところ羨ましくも思います。私自身もその姿から刺激を受け、今後も新しいことに挑戦していきたいと感じました。

働く上でも現代社会を生きていくためにも、コミュニケーション力は重要だと思っています。それを今回再認識しましたし、私も生徒たちも有効に使えると感じています。また、様々なトラブルや予期せぬ事態にも、優秀なスタッフと一緒に乗り越えられました。共に働けたことに感謝です。今回の出会いや経験を、これからも大切にしていきたいと思っています。そして、ここで得た学びを今後の活動に活かしながら、多くの人に広め、次の世代へとつなげていけるよう、積極的に取り組んでいきたいと思っています。



感想文

青少年赤十字国際交流派遣に参加して

水戸赤十字病院 看護師 今松 聡子

私自身学生の時に JRC 部で活動をしていたため、今の活動内容や国際交流に対して興味があり、参加することにしました。団員メンバーとの初対面時、みんな意思の強さや国際交流に向けての意気込み、コミュニケーション能力に刺激を受け、このメンバーたちと研修を共にすることへの期待と、同時に看護師として安全に安心して派遣研修を終了させることへ緊張感を持ちました。事前研修での個人面談で、初めての海外研修での緊張や家族と離れることへの不安、持病や車酔いへの不安を抱いており、身体面はもちろん、精神面での支えも必要であると感じました。現地では毎日健康管理ノートで健康チェックをし、その中でもやり取りできるようなるべくコメントを残すようにしました。症状があるメンバーへはその都度、症状観察や薬の投与をし、不安のある生徒には傾聴・付き添い等で対応しましたが、迷惑をかけたくないという症状を我慢しているメンバーもあり、もう少し声掛けや、定期的な検温で対応出来たら良かったと感じました。また海外のトイレ事情や訪問スケジュールであまり水分補給できず、熱中症症状

が見られたメンバーもあり、水分補給の声掛けが必要であったと課題として残りしました。発熱や病院受

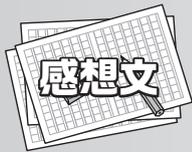


診があった中で、全員一緒に帰国できたことには安堵しました。私自身健康管理に関する課題を持つ中で、メンバー同士は相手のことを気遣い、調子が悪い生徒に声をかけ、荷物を持ち、体調が悪そうなメンバーがいると代わりに気になる症状を伝えてくれるなど、そのやり取りに助けられました。同時に、その姿を見て、今回の派遣研修に選ばれしメンバーだと感心しました。

現地青少年赤十字加盟校での交流では、訪問時から現地の踊りなどで歓迎をうけ、相手国もこの交流を楽しみにし、準備をしてくれたことに感動し、団員メンバーも事前研修からの練習の成果を発揮することが出来、その姿に事前の練習姿が重なり毎回涙が出そうになりました。それぞれの自由研究のため積極的に質問する姿もありました。体調不良にて別室で待機していたメンバーも質問時や発表のみ頑張って参加する姿があり、今回の国際交流で学びたいという意思を強く感じました。私自身は IFRC の訪問時に現地で働く日本人スタッフと会い、活動内容の話聞くことができ、同じ日本人として尊敬すると同時にとても刺激を受けました。

あまり経験することが出来ない今回の海外交流派遣に参加させていただき、沢山の学び、刺激を受けることが出来ました。事前から沢山の準備をし、最後まで導いてくださった茨城県支部の照山課長・佐谷さん、生徒との関り方や指導方法について沢山学ばせてくださった井上先生・高津戸先生・西村先生、そして沢山の笑顔とやる気で私にパワーをくれた団員のみなさん、本当にありがとうございました。出会えたことに感謝します。





マレーシアでの国際交流について

日本赤十字社茨城県支部 組織振興課長 照山 哲司

昨年に引き続きマレーシアへの派遣でしたが、赤十字関連施設の訪問や現地の青少年との国際交流、文化体験など充実した日程で、参加した生徒たちにとっても、私自身にとっても、非常に貴重で有意義な経験となり、あっという間の5泊6日でした。

事前研修で初めて顔を合わせた時は、やや緊張した様子で、初対面のメンバーとの距離感が見られましたが、研修や派遣期間を通して、互いを認め合い、励まし合いながら関係を築いていく姿が印象的でした。飛行機での長時間の移動や慣れない環境への対応など、日常とは異なる状況下でも、冷静に行動しようと努める姿勢には、責任感の芽生えを感じました。

現地の学校訪問では、ホスト校の生徒たちが温かく迎えてくださり、お互いの文化紹介や歌やダンスなどを通して交流が行われました。日本の生徒たちは練習の成果もあり、とても堂々と英語で日本の文化や学校行事、青少年赤十字での活動の発表を行い、歌やダンス、折り紙で場を盛り上げ、積極的にコミュニケーションをとって自らの考えや思いを伝えようとする姿が非常に印象的でした。伝えたいという気持ちがあれば相手に届くということ、みんな実感していたように思います。

この国際交流を通じて、生徒たちは「言葉」や「文化」の違いだけでなく、「人と人とのつながり」に焦点を当てて、相手を理解しようとする姿勢を身につけていきました。国や宗教、生活の背景が異なっても、「人を思いやる心」は共通するものであることを、体験を通して学び取っていたように思います。また、この派遣事業は、

単なる海外体験ではなく、生徒たちが「気づき・考え・実行する」力を身につける場として、非常に意義のあるものだったと確信しています。事務局としてサポートする立場でありながら、生徒たちの変化に寄り添う中で、私自身も多くの学びと感動を得ることができました。今後もこのような国際交流の機会が継続・発展していくことを願うとともに、参加した生徒たちが、今回得た経験を日常生活や今後の活動の中で活かし、成長していくことを心から期待しています。

結びに、本事業の実施にあたり、現地受け入れ先のマレーシア赤新月社の皆様をはじめ、引率いただきました指導者の先生方、看護師の今松さんに多大なるご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。





マレーシア派遣を通して得たもの

日本赤十字社茨城県支部 組織振興課 主事 佐谷詩央莉

群馬県からのバトンを受け、昨年度よりマレーシア派遣の準備を進めてまいりました。

派遣団員全員が無事に帰国できたことに安堵するとともに、それぞれが成果を得て大きく成長した姿に、事業の成功を実感しています。

この成功は、指導者の先生方、今松看護師、東武トップツアーズの高橋さん・星野さん、現地ガイドのピーターさん、通訳のチョンさん、IFRCの三亀さん、マレーシア赤新月社の皆様など、挙げきれないほど多くの方々のご支援とご協力があったからこそ成し得たものです。

改めて心より感謝申し上げます。

事業を振り返ってみると、JRCメンバーの皆さんが事業を通して成長していく姿を間近で拝見でき、私自身も多くの学びと経験を得ることができました。

この事業に携わる中でJRCメンバーに驚いたのは、親しくなるスピードの速さです。事前研修会は緊張した面持ちだったメンバー同士も、時間の経過とともに打ち解け、マレーシア派遣期間内には、現地の生徒や赤新月社職員と笑顔で交流する姿が見られました。

また、発想が豊かで、システムを上手に活用できる点も印象的でした。限られた対面機会の中でもSNS等を活用し、工夫して連携を深めていました。これは、コロナ禍を経た今だからこそ可能になった新しい形であると思いました。準備期間に限られる当事業においては、今後もこうしたデジタルツールの活用が重要だと感じています。事業運営のあり方を見直す良いきっかけにもなりました。

青少年赤十字には、「気づき」「考え」「実行する」という活動目標と、「奉仕」「健康・安全」「国際理解・親善」という実践目標があります。派遣中、メンバーは細かい指示がなくとも、自然と最善の方法を考え、実行し、よりよい国際理解・親善の実現に努めることができていました。

また、仲間を思いやる「奉仕」の心を持ち、団員全員の「健康・安全」を守ることができてこそ、「国際理解・親善」が可能になるのだということ、体験を通して学ぶことができた派遣事業だったと感じています。

この報告書を読んでもいただければお分かりの通り、メンバーの皆さんは個性豊かで、それぞれが

異なる視点を持っています。マレーシアで感じたこと、学んだことを自分の言葉で周囲の人に伝えていくことが、皆さん自身の国際理解をさらに深めると同時に、周りの人たちにとって世界について考えるきっかけになると思います。

今回の派遣事業の経験が皆さんのさらなる活躍の一助となることを期待しています。



事前研修会

〔令和7年6月14日（土）～15日（日）日本赤十字社本社504会議室〕



事後研修会

〔令和7年8月17日（日）～18日（月）日本赤十字社本社504会議室〕



.....お世話になった方たち.....



高橋さん
東武トップツアーズ株式会社



星野さん
東武トップツアーズ株式会社



ピーターさん
現地ガイド



チョンさん
現地通訳



三亀さん
IFRC

派遣事業の思い出



派遣事業の思い出

